



公立大学法人 福井県立大学
Fukui Prefectural University

ファカルティ・ディベロップメント 報 告 書 2010

2011 年 3 月

教育学習支援チーム

はじめに

本学におけるFD活動は、2003年から始められ、すでに8年が経過いたしました。くしくも、最初のFD担当の委員長は私が行うことになり、手探りの状態から出発して、試行錯誤を繰り返した記憶がよみがえってまいりました。その後、新しい委員長や委員の先生方のご努力によって、今日ではずいぶん充実した活動になったと感じております。

とくに、2007年に公立大学法人に移行してからは、FD委員会は「教育・学習支援チーム」として再編され、授業評価、研修会への参加、外部講師を招いての講習会、公開授業の拡大など積極的な取り組みが行われてまいりました。この間、ご協力いただいた学生・教職員の方々にはこの場をお借りして感謝の意を表したいと思います。

しかしながら、本学の授業評価には、依然として改善の余地が残されていることも認めざるを得ません。その点について、2010年度のチーム会議では、「FD活動もそろそろステップ・アップする時期に来ているのではないか」、「授業評価結果を第三者評価にゆだねる必要があるのではないか」、「授業評価の低い教員への何らかの対応が必要なのではないか」、「学生の自由記述欄には取り上げるべき重要な指摘があるのではないか」、「授業評価結果に対して教員はきちんとコメントを返すべきではないか」といった意見が出されました。

これらの意見のうちいくつかの項目については、各部局での議論をお願いしたところですが、各部局での議論は概ね否定的なものであったように見受けられました。結局、2010年度に行った新しい試みとしては、授業評価に対する全教員のコメント欄を設け、コメントが行われなかった場合にも空欄のままホームページに掲載するという措置にとどまりました。

すでにご承知のように、本学では、次期中期目標・中期計画策定に向けて、外部の委員を交えた「福井県立大学改革構想委員会」を立ち上げ、すでに具体的な提言をまとめた報告書も公表されております。その中には、教育の質の向上、教員評価制度の拡充など、本チームの活動と密接に関係してくると思われる提言が盛り込まれております。設置者が策定する次期「中期目標」に、これらの提言が取り入れられることは十分予想される状況であり、その場合には、次期「中期計画」において、教育の質の向上や教員評価制度の拡充などについて具体的な取り組み・方策を打ち出す必要に迫られることは必定であります。

大学を取り巻く社会的な環境が一段と厳しくなる中で、われわれとしても早急に主体的な取り組みを示す必要に迫られております。本報告書をたたき台として、教員の皆様一人ひとりが、改めてこの問題について考えていただきたいと切に願っております。

最後になりましたが、本報告書の取りまとめにご努力いただいたチーム委員・事務局の皆様とリーダーを務めていただいた本田和正先生に、心よりお礼申し上げます。

2011年3月

教育・学習支援チーム代表 坂田幹男

目次

はじめに	i
1. 活動概要	1
1.1 委員の構成	1
1.2 会議録	1
1.3 FD事業経費	12
1.4 事業の実施状況	12
1.4.1 授業評価	12
1.4.2 授業公開	21
1.4.3 FD研修	22
2. 各部局のFD活動	23
2.1 経済学部	23
2.1.1 授業評価	23
2.1.2 授業公開	23
2.1.3 基礎ゼミ担当者懇談会	25
2.2 生物資源学部	26
2.2.1 授業評価	26
2.2.2 授業公開	27
2.2.3 FD座談会	27
2.2.4 FD研修	29
2.3 海洋生物資源学部	31
2.3.1 授業評価	31
2.3.2 授業公開	31
2.4 看護福祉学部	35
2.4.1 授業評価	35
2.4.2 授業公開	35
2.4.3 FD研修	39
2.5 学術教養センター	42
2.5.1 授業評価	42
2.5.2 授業公開	42
2.5.3 FD研修	44

3. 点検と課題	46
3.1 授業評価	46
3.2 授業公開と研修	47
おわりに	50

1. 活動概要

1.1 委員の構成

チームの規定（規定第 12 号）により教育担当理事をチーム長とし，メンバーを理事が選考する．2010 年度のメンバーは，以下の 11 名の教員と 5 名の職員である．

2010 年度チーム委員名簿

氏 名	所 属	職	役 割
坂 田 幹 男	理事（教育担当）	副学長	チーム長
飛 田 正 之	経済学部	准 教 授	委員
境 宏 恵	経済学部	准 教 授	委員
加 藤 久 晴	生物資源学部	准 教 授	委員
黒 川 洋 一	生物資源学部	講 師	委員
大 竹 臣 哉	海洋生物資源学部	教 授	委員
本 田 和 正	看護福祉学部	教 授	チームリーダー
塚 本 利 幸	看護福祉学部	准 教 授	委員
菊 沢 正 裕	学術教養センター	教 授	委員
山 川 修	学術教養センター	教 授	委員
朝 日 百百代	学術教養センター	教 授	委員
秦 邦 夫	教育・学生支援部	部 長	事務局
清 川 伸 一	教育推進課	課長代理	事務局
大 野 史 博	情報ネットワーク管理室	主 任	事務局
福 島 信 一	教育推進課	主 任	事務局（福井 C）
遊 津 安 司	企画サービス室（小浜 C）	企画主査	事務局（小浜 C）

1.2 会議録

■ 第 1 回会議録

日時 平成 22 年 5 月 10 日（月） 13：00－ 14：30

場所 福井キャンパス管理棟特別会議室，小浜キャンパス TV 会議室

出席 坂田，飛田，境，黒川，大竹，本田，塚本，菊沢，山川，朝日，事務局（秦，清川，福島，遊津）

欠席 加藤，事務局（大野）

1. チームリーダーについて

坂田副学長より，昨年度に引き続き本田先生と山川先生にチームリーダーをお願いしたいとの意向が示された．

それに対し，山川先生より以前は教育の情報化事業を進めるに当たり教育学習支

援チームのメンバーを中心に進めていったが、メンバーも交替し、現在では教育の情報化事業はこのメンバーと議論するようにはなっていない。別の場で議論したものをこの場で報告する、ということになるのでサブセクションを作っても仕方ないのではないか、との考えが示され今年度はFDのチームリーダーのみとし、本田先生にお願いすることとなった。

2. FD事業について

① 2009年度事業のまとめ

- ・資料に基づいて事務局より実施状況と全体の結果について報告された。
委員より下記の意見が出された。
- ・重要項目の経年特性については、概ね同じパターンとなっており、今年度から評価項目数が大幅に減ることになるが、引き続きマクロ的に評価していけば良い。
- ・アンケートには自由記述欄があるが、取り上げないといけない意見も多いのではないかと。そろそろ第三者に評価してもらわないといけないのではないかと。
- ・P 6 の授業評価の実施結果においては生物・海洋生物資源学部と一本立てになっているのに対し、P 7 の経年特性においては生物資源学部と海洋生物資源学部とが別々に評価されている。→事務局にて調査の上、次回会議にて報告する。

② 2010年度事業について

②ー1 2010年度 FD実施事業予算について

資料に基づいて、事務局より報告された。

②ー2 2010年度授業評価について

(1) 2009年度の問題点と改善意見

- ・本田先生より前回の議事をもとに問題提起がなされた。
- ・授業評価を受けて教官がきちんと返していく事が必要だがうまく機能していないのではないかと。
- ・例えば教官コメントをシラバスに記載したり、ウェブサイトコメントさせることなど対応が必要である。
- ・翌年のシラバスに反映するために後期の授業評価の時期を早められないかとの意向もあった。

委員より下記の意見が出された。

- ・シラバスに授業評価へのコメントを載せるのはボリューム的に不可能であり、コメントはシラバスのWeb版に載せてはどうか。
- ・生物資源学部では、既にシラバスに授業評価の中身を載せている。黒板の消すスピードが早すぎるとかプリントの字が見にくいといった技術的な評価が多い。
- ・授業評価を早い時期に行ないたい先生（学部）は学習支援ツールを使ってもらう。
- ・今のFDのやり方でも、導入当初はアンケート後2～3週間で結果が公表

されていた。

- ・アンケート用紙への記載に不備（色が薄い等）があったり，期日を守らないという大学の問題で結果が出るまで時間を要している。

→次回の実施の際には，学生には「鉛筆できちんと書く」，教員には「期日を守る」といったことを実施してもらう。

時期については，補講期間の2週間前から実施することで了承された。

また，看護学科の実習については，2009年度後期から2010年度前期まで実施しており，継続性の観点から2009年度のアンケート用紙を使用し分析したいとの意向があり，今回は参加しないことが了承された。

②—3 2010年度授業公開について

2009年度の問題点と改善意見について，委員より下記の意見が出された。

- ・授業公開の結果が活かされていない。どう改善されたのかを知らしめる場がない。
- ・授業公開の参観数が少ない。
- ・授業評価を第3者に行なってもらい，評価が低い人を対象として授業公開してもらい，改善点を洗い出すという方法も考えられる。
- ・逆に，授業評価が高い教官に対し褒美を出すという考え方もある。
- ・業務改善実績書に授業の評価も行なっておりあれを学生に配ったらどうか。
- ・業務改善実績書は良いことしか書かれておらず，改善には活用できない。

今回の議論を踏まえ，各部局で授業公開に関する方針を決定することとなった。

②—4 2010年度FD研修について

2009年度の問題点について，委員より下記の意見が出された。

- ・FD研修については，本チームで主催したものはなく非常に低調であった。
- ・FD研修の予算も年間50万円あるので，各部局で話し合い計画を立案して欲しい。

3. 教育の情報化事業について

山川先生より授業支援システムの現状について説明があった。

- ・BbLSのライセンスは2013年9月までである。
- ・現在はFレックスで導入したMoodleも利用可能である。
- ・既に，何人かの先生はMoodleに移行されている。
- ・2013年にライセンスを更新することはもったいないと考えている。

次回の会議までに，山川先生が学習支援ツールの切替について整理，この場で審議・承認する。

4. その他

本田先生よりFレックスの研修会において，連携校の学生に対しアンケートをして欲しいという話があり，正式にはこの後の会議で決定される。

今のところ，学部3年生を対象としたアンケートを6月上旬に行なう予定である。その際には協力願いたい。

次回の会議は9月に実施する。

最後に坂田副学長より、欠席の際には欠席届を出すこと。学部の2名が2人とも欠席する場合は代理を立てるよう指示がなされた。

■ 第2回会議録

日時 平成22年10月4日（月）14：40－16：10

場所 福井キャンパス管理棟特別会議室，小浜キャンパス TV会議室

出席 坂田，飛田，境，加藤，黒川，大竹，本田，塚本，菊沢，山川，朝日，事務局（秦，清川，大野，福島，遊津）

1. 前期授業評価結果について

事務局より実施状況および結果が説明され，以下の質疑応答があった。

- ・学教センターの科目数が他部局より遙かに多いのはなぜか。

外国語，情報関連科目，導入ゼミ，教養ゼミなどでは複数の先生が担当するので参加科目数が増加することになる。

- ・生物資源と看護福祉が関心と総合に低下傾向が認められるが，原因の分析が必要ではないか。生物資源学部は学部が分かれたという事情があるかもしれないが，看護福祉学部については条件が変わっていないのに低下の傾向があるのはなぜか。

絶対値でみると，これまでが高すぎた傾向があると考ええる。また，看護福祉では世代交代がすすんでいることが低下の一つの原因ではないかと推測している旨回答された。これに対して絶対値での比較は意味がなく，経年変化の傾向を見る必要があるとの指摘がされた。

- ・看護福祉学部の参加科目数のパーセントが低いのはなぜか。

オムニバスの授業が多く，前期には新しいアンケート用紙が間に合わず，参加できなかった科目が多くなったことが主原因であることが回答された。

2. 各部局におけるFD事業のあり方について

経済学部

授業評価の低い授業の公開についての意見

賛成意見なし。高い評価の授業であれば見に行ってもよいが，低い評価の授業はわざわざ見に行きたくない。懲罰的取り組みは本来のFDの趣旨に合わない。学生の回答に信頼性が持てない部分があるので，その点数を使って低い評価の授業を公開するのは問題である。経済学部で独自に取り組み可能な事項がある。例えば昨年度は関連のある授業間あるいは関連のある教員間での授業公開がなされ，この取り組みをもう少し進めていくのも良い。

生物資源学部

授業評価の低い授業の公開についての意見

生物資源学部には教育面，勤務態度などで懸念される教員はいない。問題の

ある教員については学部長が指導すれば良いと考えており、授業評価の低い教官の授業公開に賛成する意見はない。学生の評価が低い＝教員に問題があるという短絡的観察はのぞましくない。評価が低い原因を明らかにすべきである。学生の評価を気にしてあまりやる気のない学生をつけあがらせることでもいけない。授業評価の低い教員に授業公開してもらうことは教員のやる気を削いでしまう。

FDに関する座談会を開催

内容はWEBに公開してある。

海洋生物資源学部

授業評価について

受講者数が少なく評価に適さない授業がある。乱暴な学生コメントが多く、返す言葉もないこともあり、面食らっている等の意見があった。今年からアンケート内容も整理されて意見も出しやすくなったので今後も続けていけばと考える。

授業公開について

参観する教官は多いが、いつも同じ顔ぶれになってしまい、それを解決するに至っていないのが現状である。後期も受講学生が多い授業について実施していく予定である。

看護福祉学部

看護学科

授業評価および授業公開のあり方についてアンケートを実施

授業評価

点数を受け止めて参考にしている。学生の自由記述が少ないので学生の生の声が聞けてない。点数はあまり気にせず、自由記述意見を参考に改善を試みている。

授業公開

授業公開は不要と言う意見が最も多く、次いで、現在の実施方（依頼して実施）では公開実施日に参観できない（実習等で不在）等の意見が多かった。後期より公開可能な科目について随時公開する予定である。

社会福祉学科

授業評価および授業公開のあり方についてアンケートを実施

授業評価

淡々とデータを積み上げて続けていくことに意味があるとの意見

授業公開

公開の必要がない（半数）

漠然と公開されても参観しない。事前に授業の工夫点がアナウンスされていれば参観する。外部講師等によるモデル授業等の方が参考になる。

これまでの方法で公開を続けていけばよい（半数）

学術教養センター

授業公開

現状通り，随時公開を実施する．

授業評価のコメント表記について

授業評価に対するコメントを web 上に掲載するという点については異論なし．掲載にあたっているいろいろな問題がある．Web ページの URL の QR コードをどこかに掲載するだけでよいのではないか．シラバスにはコメントがどこにあるという指示文のみでよいのではないか．シラバスをオンラインで使いやすくすることはできないか．pdf 形式ではなく，HTML 形式にすれば事務局の負担も軽減されるのではないか．

以上の報告を受けて以下の議論がされたが，この問題は今後も継続議論していく事となった．

- ・議論の出発点は FD のステップアップが必要な時期が来ているので，そのためにはどうということから取り組めるかという議論の中で，授業評価の低い先生に対して授業公開してもらってはどうかということで各部局の意見を聞いてみるということであった．各部局では懲罰的な方法についての賛成意見はなかったが，FD（授業評価結果）が横ばい，または右下がりの状況下で，このままで良いのか．
- ・授業公開の当初目的はモデルに学ぶことであり，次のステップは評価の低い授業がなぜ低いのかを皆で考えて改善していこうということである．
- ・授業改善の為のモチベーションをいかにして上げるかを議論していくことが重要である．学生の授業評価そのものを信用できないという意見があるが，学生の評価やコメントはそこに何らかの不満が入っているためであるから，真摯に受け止めるべきである．
- ・生物資源学部では苦手意識を持つ学生にはどのように対処しても低い評価となることを経験しているので，講義がすばらしくても，学生の受講態度を改める必要があると考える．学生が授業内容に関心を高める工夫，study methods を並べたり，食の歴史と文化，将来的に持続可能な化学技術を考えるにはどうすればよいかなど，学生が主体的に調べたり考えたりする講義を将来的に考えていくという話し合いが学部内でされている．
- ・評価をいつ実施するかによって評価結果が変わることがある．難しい授業の時に実施すれば評価が低くなり，易しい授業の時には高くなるなど．したがって，同じ条件の経年変化をみることに意味があると考えます．
- ・試験も授業の一環であり，実際，試験前には学生の質問への個別対応に相当量の労力を費やしているので，授業評価は試験終了後に実施してもよいのではないか．

3. F レックス合宿研修会報告

資料に基づいて山川委員より報告された．

4. 授業評価への教官コメントの公表について

教育推進委員会にて全教員の授業評価へのコメント欄を web 上に用意し、最低でもコメントなしのコメントをしてもらうこととした旨が報告された。

5. 学習支援ツールの切り替えについて

本学で使用している学習支援ツール（BbLS）のライセンス切れが 2013 年 9 月 30 日で、これを機に F レックスで使用されている moodle に切り替えることをアナウンスすることの提案。Moodle の維持費用を大学で予算化してもらうことが条件となる。教育推進企画推進委員会にて提言してもらうと同時に、予算措置については事務局で検討調整していく事で了承された。

6. オムニバス授業・通年科目の授業評価方法について

オムニバス授業

アンケート用紙の回収、コメントの掲載方法等に取り扱いの煩雑性があり、事務局の負担が大きくなっている。

通年科目

今年度は学部 111、院 16 で、ほとんどが演習、実習である。また、後期の結果に入れるのかどうかなどが明確になっていない。

上記説明を受けて、後期授業評価開始までに、実施対象科目等について整理することとした。

7. F レックス学生アンケートの今後の継続について

資料に基づいて、アンケート内容と本学の結果について山川委員より説明された。

このアンケートを継続的に実施することで学生支援、授業の改善に結びつけることができると考えられる。

- ・分析は F レックスでチームを作って実施。
- ・アンケートは LMS 上で実施
- ・記名で実施し学生の成績との関連を分析できれば個別指導が可能となる。

実施についてはチームとしては賛成するが、記名での実施については教授会で審議してもらう必要があることが確認された。

8. GPA の導入と IR 機能の配置について

資料に基づいて菊沢委員より説明があり、GPA および IR 配置について導入を議論していくことが提案された。

上記提案を受けて以下の質問、議論がされ、今後 GPA と IR について認識を高める議論をしていくことが了承された。

- ・ GPA は何の為に実施するか目的をはっきりさせる必要がある。CAP と組み合わせて実施すべき。GPA が高いと次の学期の単位がたくさん取れ、GPA が低いと次の学期の単位修得に制限を加えるなどの方法と組み合わせて実施すべき。
- ・ GPA の点数が出たらどのように利用するのか。

GPA が高い人は飛び級できる。低いと退学勧告。GPA が基準より低い場合は次の学期の単位履修に制限を加えるなど。学士入学、大学院入学などの判断材料として

利用できる。学生に GPA 目標を提示することで学習意欲の向上につなげることができる。

- ・教員間の評価が違うことを標準化する必要があるのはなぜか。どのような方法で標準化するのか。

数値化して評価するにはあまりに評価方法が違うのは良くないので GPA 導入に合わせて標準化した方が望ましい（必要条件ではない）。

9. 授業評価調査票の保存年限について

過去3年間のみを保存してそれ以前のものを処分したい旨、了承された

10. 後期授業評価日程について

平成23年1月12日（水）から1月25日（火）

11. 次回チーム会議開催予定

平成23年3月上旬

■ 第3回会議録

日時 平成23年3月23日（水）10:40-12:00

場所 福井キャンパス管理棟特別会議室，小浜キャンパス TV会議室

出席 坂田，境，加藤，黒川，大竹，本田，塚本，菊沢，山川，朝日，事務局（清川，福島，遊津）

1 前回議事録（案）の承認

前回の審議事項の中で、「②オムニバス授業・通年科目の授業評価方法について」は、後期授業評価開始までに、実施対象科目等について整理することとなっており、事務局にて素案を作成し、メールにて各教員に確認いただいた。

その結果、いくつかの指摘があったため、再整理し、ご確認頂いた。

○通年科目は、実験、実習（指導）、論文（指導）、研究、卒業研究、演習教科はアンケート調査の対象外とする。

○アンケート期間中にオムニバス科目で複数のアンケートを希望する場合は、事前にその旨を事務局に連絡する。事務局にてアンケート用紙と封筒を準備する。

○アンケート期間前にオムニバス科目でアンケートを希望する場合、通年科目の実験、実習（指導）、論文（指導）、研究、卒業研究、演習教科でアンケートを希望する場合は、各学部事務所に備え付けのアンケート用紙と所定の封筒を使用し、アンケートを実施し、教育推進課横のポストに投函する。

（教員は「科目名・教員名・配布枚数」を必ず記入すること。）

○後期～前期の通年科目についても、各学部事務所に備え付けのアンケート用紙と所定の封筒を使用し、アンケートを実施し、教育推進課横のポストに投函する。

○アンケート期間後に授業を行なう科目については、アンケート対象外とする。

2 議 事

(1) 2010年度FD事業報告について

① 授業評価について

事務局より実施状況および結果が説明され、以下のコメントがあった。

○参加科目の割合が低い。

- ・外部評価の指標となることから、参加すべき科目のみを分母とすべきではないか。

○授業評価を無視する教員がいるのではないか。

- ・授業評価を無視し、アンケートを実施しない教員がいるのではないか。

○授業評価アンケート結果に対する教員コメントについて、空欄の教員が多い。

- ・授業評価に対する教員コメント欄は、「学生へのメッセージ」であるので、空欄のままは好ましくない。
- ・後期のアンケート結果については、コメントを必ず記載するように、教授会で各教員に対して伝えて欲しい。

② 後期各部局のFD活動について

経済学部

○授業評価について

おおむね安定した推移を示しており、前期と比べ後期の方が評価がやや高い。他部局と比較して、「関心」「総合」の評価がやや低い傾向が見られ、「内容」は低い傾向が見られる。講義形式（大講義）に因っていると思われるが、丁寧な検討が必要である。

○授業公開について

1月17日に授業公開を実施し、4名の教員が参加した。講義後約30分間検討会を実施し、活発な意見交換が行なわれた。

また、7月21日に基礎演習担当者懇談会を実施した。

生物資源学部

○授業評価について

前期に関しては、昨年度以降「内容」「関心」「総合」いずれも評価が低下傾向にあり、特に「内容」の落ち込みが目立つ。これに対し、後期は「関心」「総合」は安定しているが、「内容」は漸減傾向にある。

前期は、必修科目が多いためほぼ全ての受講生による結果であるが、後期は選択科目が多くなるため相対的に真面目な受講生を多く含むため、前期の評価が低めに、後期のそれが高めに出るのではないかと。受講生の成績との関係も分析する必要があると考えている。

「理解度の低下」には、自ら考える姿勢が必要な大学の講義について来られないとの「伝統的解釈」に加え、一部の学生は高校で高度な教育を受けており（スーパーサイエンススクールSSHなど）、教員が一方的に教える講義に飽きてしまうためについて来られないとの「現代的解釈」も必要ではないか。その他、学生の主体性や意欲の低下も背景にあると考えている。

○授業公開について

今年度は実績がなかったが、学生の理解度に関する情報を共有すべく、実

験の感想や講義中の学生の「現状」を教員が会議あるいはMLで互いに報告し、情報共有を行なっているほか、授業改善のための議論を継続して行っている。具体的には、6月1日にFD座談会を行い、「学生の気質」を理解し、効果的な指導を行うための工夫を報告し、話し合っている。

海洋生物資源学部

○授業評価について

前期、後期で経年変化の傾向が異なるように見受けられる。

前期の場合、「関心」に対する評価は低い、「内容」に対する評価は低下傾向だが他学部よりも高く、「総合」も高い。

後期は、「内容」、「関心」、そして「総合」も減少傾向であり、他学部に比べてもその傾向は強い。

年次別の分析や、海洋の学生の一般教育のみを評価するなどの分析が必要である。

○授業公開について

前期、後期1科目ずつ授業公開を行なった。

後期の授業公開は、新人の先生を対象として行ない、参加者からは授業内容も非常に良かったとの感想が寄せられ、新人の先生もこの制度は良いとの感想であった。

看護福祉学部

看護学科

○授業評価について

前期は3項目とも大きく低下している。オムニバス授業が前期の評価に入っていないためではないか。

後期は、「理解」が前期と同様に低下している。1年次生の学力低下が原因かもしれないが、結論はできない。

○授業公開について

前期は1科目授業公開を行なった。

後期はアンケートを取って、「公開しても良い」という先生の科目17科目を公開したが、参加者は0であった。

←教員に参観の義務を課したらどうか。

社会福祉学科

○授業公開について

前期は2科目を対象として随時授業公開、1科目を対象として2回授業公開を行なった。2回に絞った科目について1名の参加があった。

後期は1科目を対象として随時授業公開を行なったが、参加はなかった。

何らかの手当てが必要であると考えている。

←FD報告書で教員に「授業参観」を義務づける提案をして欲しい。

学術教養センター

○授業評価について

前期に比べ後期の方が評価が高い。

○授業公開について

学術教養センターでは、全ての科目を授業公開の対象としている。

オムニバス授業の「日本の文化と社会」も授業公開の対象となっているがオムニバス講義を公開授業にするのは有意義である。

←学教Cは常時公開と言っているが、参加される方はあるか。

→今年度実績はない。

←公開対象を絞った方がよいのか、全て常時公開の方が良いか。

→公開対象を絞ると、評価の低い先生の授業を参観できない。

○FD研修について

Fレックス主催のFD合宿研修会および研究会「学習評価・GPAの導入と学士力保証」に参加。

③ 決算報告について

2010年度のFD事業経理の大項目と細目、およびその実績を示す。

招聘がなかったことによって報償費、旅費が大きく減ったが、FDアンケート回収ポストの購入やFD報告書2009の印刷により、全体としては146,802円の増となった。

←報償費と旅費とが大きく余っており、次年度はFD研修や外部講師の招聘を積極的に働きかけるべきではないか。

④ 「ファカルティ・ディベロップメント報告書2010」の作成について

各部局の授業評価結果へのコメントについては、各部局のFD活動のところに入れなす。

経済学部で言うと、「2.1.1 授業評価」「2.1.2 授業公開」「2.1.3 教員向けアンケート」のように、授業評価へのコメントを各部局のFD活動の一番初めに記載する。

報告書を印刷する必要があるかとの問題提起があったが、印刷し、全教員・非常勤講師に配布することが確認された。

校正等はMLを使いながら行ない、原稿の締め切りは今年度末（3月31日）とする。FD報告書が終わるまでは現メンバーで対応する。

表紙の文字が消えやすいので何とかするように要請する。

⑤ その他

⑤-1 Fレックス学生アンケートの今後の継続について

山川委員より教育企画推進委員会での審議状況について、確認があった。

平成22年度第10回教育企画推進委員会（平成23年2月2日）で、アンケートを継続実施することは確認された。また、アンケートは無記名で行なうことも併せて確認された。

前回の教育学習支援チーム会議（平成 22 年 10 月 4 日）で、山川委員から、「アンケートを記名で実施し学生の成績との関連を分析できれば個別指導が可能となる」との話があったが、平成 23 年度（秋を予定）は、一回無記名でアンケートを行なってみて、次のステップとして記名にするかどうかの検討を行なうことが本会議で確認された。

⑤－２ GPAとIRについて

GPAとIRについて、平成 23 年度計画の中にあげており、今後教育企画推進委員会で検討を行なうことが報告された。

1.3 FD事業経費

2010年度のFD事業経理の大項目と細目、およびその実績を示す。招聘がなかったことによって報償費、旅費が大きく減ったが、FDアンケート回収ポストの購入やFD報告書2009の印刷により、全体としては146,802円の増となった。

平成22年度 FD事業経費(実績)

(単位:円)

費目	項目	細目	実績
旅費			32,600
	派遣	FD研修(F-レックス合宿研修会)(9/3～4)	16,936
	派遣	FD研修(F-レックス合宿研修会)(9/3～4)	15,664
消耗品費			25,032
		FDアンケート回収ポスト	25,032
委託料			2,245,950
		前期授業評価	955,500
		後期授業評価	966,000
		FD報告書2009 印刷	324,450
合計			2,303,582

1.4 事業の実施状況

1.4.1 授業評価

実施概要、質問用紙と回答用紙、全体集計結果を 13 頁より順に掲載する。今年度は従来の 18 項目から 5 項目へ質問数を限定してアンケートを実施した。13 頁の実施概要を 2009 年度のそれと比較すると、前期の学部に参加科目が 351 科目から 318 科目に減少(内訳は経済学部 2 科目増、生物資源学部 9 科目減、・海洋資源学部 12 科目減、看護福祉学部 8 科目減、学術教養センター6 科目減)し、後期は 289 科目から 295 科目に増加(内訳は経済学部 16 科目増、生物資源学部 2 科目増・海洋資源学部 3 科目増、看護福祉学部 8 科目減、学術教養センター7 科目減)した。

平成22年度前期 学生による授業評価の実施結果

★実施期間

平成22年7月8日(木)～7月22日(木)

★調査票配布・回収状況

＜学部＞	回収数	配布数
経済学部	2,091 枚	6,435 枚
生物資源学部	797 枚	1,343 枚
海洋生物資源学部	900 枚	1,688 枚
看護福祉学部	1,580 枚	2,556 枚
学術教養センター	4,622 枚	8,532 枚
計	9,990 枚	20,554 枚

＜大学院＞	回収数	配布数
経済・経営学研究科	52 枚	152 枚
生物資源学研究科	49 枚	139 枚
看護福祉学研究科	66 枚	89 枚
計	167 枚	380 枚

★参加教員

＜学部＞		
経済学部	29 人	93.5%
生物資源学部	14 人	87.5%
海洋生物資源学部	16 人	94.1%
看護福祉学部	30 人	85.7%
学術教養センター	27 人	96.4%
非常勤講師	48 人	67.6%
計	164 人	82.8%

＜大学院＞		
経済・経営学研究科	8 人	88.9%
生物資源学研究科	5 人	71.4%
看護福祉学研究科	14 人	93.3%
非常勤講師	6 人	33.3%
計	33 人	67.3%

★参加科目

＜学部＞		
経済学部	57 科目	77.0%
生物資源学部	23 科目	74.2%
海洋生物資源学部	30 科目	69.8%
看護福祉学部	44 科目	64.7%
学術教養センター	164 科目	82.8%
計	318 科目	76.8%

＜大学院＞		
経済・経営学研究科	13 科目	54.2%
生物資源学研究科	7 科目	50.0%
看護福祉学研究科	19 科目	63.3%
計	39 科目	57.4%

平成22年度後期 学生による授業評価の実施結果

★実施期間

平成23年1月12日(水)～1月25日(火)

★調査票配布・回収状況

＜学部＞	回収数	配布数
経済学部	1,655 枚	4,918 枚
生物資源学部	789 枚	1,540 枚
海洋生物資源学部	464 枚	1,259 枚
看護福祉学部	1,556 枚	4,717 枚
学術教養センター	3,029 枚	8,213 枚
計	7,493 枚	20,647 枚

＜大学院＞	回収数	配布数
経済・経営学研究科	40 枚	57 枚
生物資源学研究科	45 枚	135 枚
看護福祉学研究科	23 枚	41 枚
計	108 枚	233 枚

★参加教員

＜学部＞		
経済学部	29 人	82.9%
生物資源学部	14 人	87.5%
海洋生物資源学部	12 人	70.6%
看護福祉学部	35 人	89.7%
学術教養センター	24 人	88.9%
非常勤講師	30 人	55.6%
計	144 人	76.6%

＜大学院＞		
経済・経営学研究科	7 人	50.0%
生物資源学研究科	6 人	42.9%
看護福祉学研究科	5 人	45.5%
非常勤講師	2 人	28.6%
計	20 人	43.5%

★参加科目

＜学部＞		
経済学部	76 科目	65.0%
生物資源学部	28 科目	70.0%
海洋生物資源学部	13 科目	39.4%
看護福祉学部	52 科目	65.0%
学術教養センター	126 科目	71.6%
計	295 科目	66.1%

＜大学院＞		
経済・経営学研究科	11 科目	52.4%
生物資源学研究科	6 科目	30.0%
看護福祉学研究科	6 科目	42.9%
計	23 科目	41.8%



福井県立大学 授業に関する調査

質問および回答用紙

この調査は、県立大学が皆さんに提供している教育を、より良いものにしていくために
行うものです。あなたが現在受けているこの授業についての調査にご協力ください。

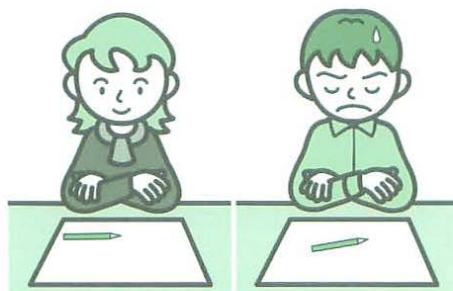
回答は裏面の回答欄に記入してください。

あなたに当てはまるもの、あなたの意見や感想にもっとも近いものの番号をマーク、記述
してください。

記入上の注意

- 1：選択回答の場合はマークシート記入を、記述回答の場合は対応する空欄に記述
してください。
- 2：記入は濃い(B程度)鉛筆またはシャープペンシルで強く書いてください。
- 3：訂正する場合は、プラスチック消しゴムで完全に消してください。
- 4：用紙は、コンピュータ処理しますので、折り曲げたり汚したりしないでください。

マーク例) 良い例 ②...▶● 悪い例 ②...▶✖✖✖✖✖



本アンケートによる(全学、学部別等)授業評価結果は、本学
ホームページ上で今学期末に開示予定です。

過去の集計結果は <http://www.s.fpu.ac.jp/FD/lecinq.html>
をご覧ください。

学籍番号の上から1ケタ目の数字をマークしてください。

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9

例) 平成 21 年 4 月入学生・・・0

学籍番号の上から2ケタ目の数字をマークしてください。

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9

例) 平成 21 年 4 月入学生・・・9

学部生 所属の番号をマークしてください。

1: 経済学部経済学科 2: 経済学部経営学科 3: 生物資源学部生物資源学科 4: 海洋生物資源学部海洋生物資源学科
5: 看護福祉学部看護学科 6: 看護福祉学部社会福祉学科 7: 科目等履修生・聴講生

1 2 3 4 5 6 7

大学院生 所属の番号をマークしてください。

8: 経済・経営学研究科 地域・国際経済専攻 9: 経済・経営学研究科 経営学専攻 10: 生物資源学研究科 生物資源学専攻
11: 海洋生物資源学研究科 海洋生物資源学専攻 12: 看護福祉学研究科 看護学専攻 13: 看護福祉学研究科 社会福祉学専攻 14: 科目等履修生・聴講生

8 9 10 11 12 13 14

質問および回答欄

Q1 この授業(課題、レポート、予習復習を含む)に意欲的に取り組みましたか?

①意欲的に取り組まなかった ②あまり意欲的に取り組まなかった ③ある程度意欲的に取り組んだ ④意欲的に取り組んだ

1 2 3 4

Q2 先生の講義の方法(話し方、板書、プロジェクターの使用、学習支援システム等の活用)はどうでしたか?

①不適切 ②やや不適切 ③まずまず適切 ④適切

1 2 3 4

Q3 授業中の内容はどの程度理解できましたか?

①理解できなかった ②あまり理解できなかった ③ある程度理解できた ④理解できた

1 2 3 4

Q4 この授業の分野への関心は高まりましたか?

①高まらなかった ②あまり高まらなかった ③少し高まった ④高まった

1 2 3 4

Q5 この授業を総合的に評価してください。

①良くない ②あまり良くない ③まずまず良い ④良い

1 2 3 4

Q6 授業を受けた上での感想(先生の授業への熱意、方法、教材、授業内容はシラバスに即していたか、教室環境など)を良かった点あるいは不備な点について自由に書いてください。

Q6 の自由記述欄

Q7 教員設定の質問(別紙参照)

1 2 3 4

Q8 教員設定の質問(別紙参照)

Q8 の自由記述欄

ご協力ありがとうございました

全体集計結果の見方

次頁より授業評価の集計結果を学部（前期・後期）、大学院（前期・後期）の順に掲載する．以下に，集計結果の見方を記す．

全集計数	回答された全てのアンケートから学部・学科・入学年度が不明のデータを除いたもの．
Q1 から Q5	アンケートの Q1 から Q5 に対応 設問のキーワードを記すが，詳細は 15 頁を参照．
数値上段	平均値（質問は，4 件法）
数値下段	母標準偏差．数値が大きい場合，平均値周りに正規分布状にばらつきが大きい時もあるが，良い評価と悪い評価が 2 分されている場合もあるので要注意．
集計方法	設問は，回答選択肢「1， 2， 3， 4」をそれぞれ「1 点，2 点，3 点，4 点」と得点化，設問に対して無回答の場合は得点化せず，かつ有効回答数としては計上していない．この得点化規則に則り，設問別，集計グループ別に合計得点を求めて，有効回答数で割った平均値を上段に，母標準偏差を下段に示す．無回答の場合の人数は母集団に含めず．「―」の欄は有効回答が無かったことを示す．

〔集計グループ〕

全体	全ての集計対象者
学部学科別	当該学部または学科の学生の評価結果を集計
入学年次別	学部学科の枠を越え，学生の入学年次（西暦年の下 2 桁）別に集計
部局別	当該学部に所属する教員が提供する科目に対する評価結果を集計
規模別	授業が行われた教室の大小別に集計

全体集計結果（学部・前期）

集計グループ（集計数）	Q1意欲的受講	Q2授業方法	Q3内容理解	Q4関心	Q5総合評価
全体（9499）	3.17 0.73	3.19 0.75	3.02 0.74	3.10 0.80	3.25 0.72
学部学科別（9499）					
経済学部（4220）	3.18 0.73	3.19 0.75	3.03 0.75	3.10 0.80	3.25 0.71
経済学科（2149）	3.18 0.73	3.21 0.74	3.04 0.74	3.10 0.80	3.27 0.70
経営学科（2071）	3.17 0.73	3.17 0.76	3.03 0.76	3.10 0.81	3.23 0.72
生物資源学部（1369）	3.13 0.70	3.18 0.73	2.97 0.70	3.08 0.76	3.25 0.72
生物資源学科（1369）	3.13 0.70	3.18 0.73	2.97 0.70	3.08 0.76	3.25 0.72
海洋生物資源学部（1553）	3.13 0.77	3.16 0.74	3.00 0.75	3.00 0.82	3.19 0.70
海洋生物資源学科（1553）	3.13 0.77	3.16 0.74	3.00 0.75	3.00 0.82	3.19 0.70
看護福祉学部（2341）	3.20 0.70	3.23 0.78	3.05 0.73	3.18 0.78	3.28 0.74
看護学科（1559）	3.24 0.69	3.19 0.82	3.06 0.77	3.16 0.80	3.24 0.78
社会福祉学科（782）	3.12 0.71	3.30 0.68	3.02 0.62	3.22 0.75	3.35 0.66
科目等履修生・聴講生（16）	3.25 0.83	3.63 0.60	3.44 0.61	3.31 0.68	3.44 0.61
入学年次別（9499）					
03生（3）	3.33 0.47	2.67 0.47	2.67 0.47	3.00 0.00	3.00 0.00
04生（2）	3.00 0.00	3.50 0.50	3.00 0.00	2.50 0.50	3.50 0.50
05生（21）	3.19 0.59	3.19 0.73	3.10 0.61	3.10 0.68	3.33 0.56
06生（53）	3.34 0.58	3.53 0.54	3.30 0.66	3.40 0.59	3.49 0.57
07生（313）	3.26 0.66	3.34 0.66	3.19 0.63	3.30 0.71	3.42 0.62
08生（1999）	3.19 0.72	3.21 0.75	3.05 0.71	3.15 0.78	3.27 0.72
09生（2937）	3.15 0.70	3.19 0.72	3.02 0.71	3.11 0.76	3.24 0.70
10生（4171）	3.16 0.75	3.18 0.78	3.00 0.78	3.05 0.84	3.23 0.74
部局別（9499）					
経済学部（1993）	3.13 0.73	3.13 0.78	2.94 0.77	3.07 0.80	3.19 0.74
生物資源学部（755）	3.07 0.70	3.11 0.74	2.90 0.71	3.09 0.78	3.21 0.73
海洋生物資源学部（863）	3.13 0.74	3.18 0.70	3.00 0.70	3.00 0.77	3.19 0.66
看護福祉学部（1472）	3.24 0.67	3.22 0.79	3.08 0.71	3.23 0.77	3.28 0.75
学術敬養センター（4416）	3.19 0.74	3.23 0.74	3.07 0.74	3.09 0.81	3.28 0.70
規模別（9499）					
100人以上（4774）	3.09 0.75	3.12 0.78	2.94 0.76	3.03 0.82	3.17 0.74
100人未満（4725）	3.25 0.70	3.27 0.72	3.11 0.70	3.17 0.76	3.32 0.69

全体集計結果（学部・後期）

集計グループ（集計数）	Q1意欲的受講	Q2授業方法	Q3内容理解	Q4関心	Q5総合評価
全体（7040）	3.22 0.70	3.30 0.72	3.10 0.72	3.21 0.77	3.35 0.67
学部学科別（7040）					
経済学部（3220）	3.21 0.72	3.30 0.73	3.08 0.74	3.19 0.77	3.35 0.68
経済学科（1783）	3.19 0.73	3.29 0.73	3.07 0.73	3.17 0.78	3.34 0.68
経営学科（1437）	3.23 0.71	3.30 0.73	3.10 0.74	3.22 0.75	3.36 0.68
生物資源学部（1073）	3.17 0.69	3.25 0.68	3.02 0.71	3.14 0.74	3.32 0.66
生物資源学科（1073）	3.17 0.69	3.25 0.68	3.02 0.71	3.14 0.74	3.32 0.66
海洋生物資源学部（776）	3.14 0.69	3.24 0.70	3.03 0.70	3.11 0.78	3.25 0.64
海洋生物資源学科（776）	3.14 0.69	3.24 0.70	3.03 0.70	3.11 0.78	3.25 0.64
看護福祉学部（1957）	3.30 0.68	3.34 0.72	3.18 0.70	3.32 0.76	3.41 0.68
看護学科（1299）	3.36 0.66	3.34 0.75	3.23 0.70	3.36 0.74	3.41 0.70
社会福祉学科（658）	3.18 0.70	3.34 0.65	3.09 0.67	3.23 0.78	3.40 0.65
科目等履修生・聴講生（14）	3.21 0.67	3.36 0.61	2.79 0.77	3.21 1.08	3.43 0.49
入学年次別（7040）					
03生（4）	3.00 1.00	2.50 0.87	2.25 0.83	2.75 1.09	2.25 0.83
04生（0）	— —	— —	— —	— —	— —
05生（10）	3.20 0.75	3.30 1.00	3.40 0.80	3.90 0.30	3.40 0.80
06生（48）	3.17 0.87	3.48 0.68	3.04 0.61	3.25 0.60	3.58 0.67
07生（382）	3.35 0.68	3.46 0.62	3.27 0.60	3.41 0.68	3.52 0.60
08生（943）	3.32 0.67	3.43 0.63	3.22 0.64	3.39 0.68	3.49 0.59
09生（2675）	3.19 0.70	3.25 0.70	3.05 0.71	3.19 0.77	3.31 0.67
10生（2978）	3.20 0.71	3.27 0.76	3.07 0.76	3.15 0.79	3.32 0.70
部局別（7040）					
経済学部（1530）	3.16 0.74	3.25 0.75	3.02 0.73	3.17 0.77	3.31 0.70
生物資源学部（741）	3.16 0.67	3.26 0.66	2.99 0.71	3.16 0.75	3.31 0.64
海洋生物資源学部（432）	3.11 0.65	3.24 0.66	2.95 0.64	3.04 0.76	3.22 0.59
看護福祉学部（1485）	3.34 0.67	3.36 0.72	3.21 0.68	3.38 0.75	3.43 0.69
学術教養センター（2852）	3.22 0.71	3.30 0.72	3.12 0.74	3.18 0.77	3.37 0.67
規模別（7040）					
100人以上（3492）	3.13 0.71	3.23 0.74	3.02 0.74	3.13 0.79	3.28 0.69
100人未満（3548）	3.31 0.68	3.36 0.69	3.17 0.70	3.29 0.74	3.42 0.65

全体集計結果（大学院・前期）

集計グループ（集計数）	Q1意欲的受講	Q2授業方法	Q3内容理解	Q4関心	Q5総合評価
全体（156）	3.47 0.65	3.65 0.56	3.38 0.62	3.60 0.54	3.64 0.55
研究科専攻別（156）					
経済・経営学研究科（43）	3.56 0.73	3.58 0.75	3.51 0.62	3.67 0.52	3.60 0.65
地域・国際経済政策専攻（12）	3.75 0.43	3.83 0.55	3.50 0.65	3.75 0.43	3.67 0.62
経営学専攻（31）	3.48 0.80	3.48 0.80	3.52 0.62	3.65 0.54	3.58 0.66
生物資源学研究科（34）	3.44 0.55	3.68 0.47	2.97 0.51	3.44 0.50	3.65 0.54
生物資源学専攻（34）	3.44 0.55	3.68 0.47	2.97 0.51	3.44 0.50	3.65 0.54
海洋生物資源学研究科（14）	3.86 0.35	3.57 0.49	3.43 0.62	3.50 0.50	3.50 0.50
海洋生物資源学専攻（14）	3.86 0.35	3.57 0.49	3.43 0.62	3.50 0.50	3.50 0.50
看護福祉学研究科（65）	3.34 0.66	3.69 0.46	3.51 0.59	3.66 0.56	3.69 0.49
看護学専攻（13）	3.08 0.47	3.85 0.36	3.46 0.50	3.62 0.49	3.77 0.42
社会福祉学専攻（52）	3.40 0.69	3.65 0.48	3.52 0.60	3.67 0.58	3.67 0.51
科目等履修生・聴講生（0）	— —	— —	— —	— —	— —
入学年次別（156）					
03生（0）	— —	— —	— —	— —	— —
04生（0）	— —	— —	— —	— —	— —
05生（0）	— —	— —	— —	— —	— —
06生（1）	3.00 0.00	4.00 0.00	3.00 0.00	4.00 0.00	4.00 0.00
07生（4）	3.50 0.50	3.75 0.43	3.50 0.50	4.00 0.00	3.50 0.50
08生（0）	— —	— —	— —	— —	— —
09生（15）	3.40 0.61	3.40 0.61	3.13 0.50	3.47 0.50	3.40 0.61
10生（136）	3.48 0.66	3.67 0.56	3.41 0.64	3.60 0.55	3.67 0.54
部局別（156）					
経済・経営学研究科（44）	3.55 0.72	3.59 0.75	3.50 0.62	3.66 0.52	3.59 0.65
生物資源学研究科（47）	3.57 0.54	3.64 0.48	3.11 0.59	3.47 0.50	3.62 0.53
看護福祉学研究科（65）	3.34 0.66	3.69 0.46	3.51 0.59	3.66 0.56	3.69 0.49

全体集計結果（大学院・後期）

集計グループ（集計数）	Q1意欲的受講	Q2授業方法	Q3内容理解	Q4関心	Q5総合評価
全体（102）	3.47 0.74	3.70 0.52	3.34 0.59	3.57 0.60	3.69 0.50
研究科専攻別（102）					
経済・経営学研究科（36）	3.53 0.80	3.75 0.49	3.56 0.50	3.72 0.51	3.72 0.51
地域・国際経済政策専攻（2）	1.00 0.00	4.00 0.00	4.00 0.00	4.00 0.00	4.00 0.00
経営学専攻（34）	3.68 0.53	3.74 0.50	3.53 0.50	3.71 0.52	3.71 0.52
生物資源学研究科（36）	3.56 0.64	3.64 0.58	3.36 0.54	3.67 0.47	3.64 0.54
生物資源学専攻（36）	3.56 0.64	3.64 0.58	3.36 0.54	3.67 0.47	3.64 0.54
海洋生物資源学研究科（7）	3.14 0.64	3.86 0.35	3.14 0.64	3.00 0.53	3.71 0.45
海洋生物資源学専攻（7）	3.14 0.64	3.86 0.35	3.14 0.64	3.00 0.53	3.71 0.45
看護福祉学研究科（23）	3.35 0.76	3.65 0.48	3.04 0.62	3.35 0.76	3.70 0.46
看護学専攻（9）	3.33 0.67	3.78 0.42	3.22 0.63	3.44 0.50	3.67 0.47
社会福祉学専攻（14）	3.36 0.81	3.57 0.49	2.93 0.59	3.29 0.88	3.71 0.45
科目等履修生・聴講生（0）	— —	— —	— —	— —	— —
入学年次別（102）					
03生（0）	— —	— —	— —	— —	— —
04生（0）	— —	— —	— —	— —	— —
05生（0）	— —	— —	— —	— —	— —
06生（0）	— —	— —	— —	— —	— —
07生（4）	4.00 0.00	4.00 0.00	3.50 0.50	3.75 0.43	3.75 0.43
08生（4）	3.25 0.43	3.50 0.50	3.25 0.43	3.25 0.43	3.50 0.50
09生（21）	3.57 0.49	3.43 0.66	3.24 0.53	3.48 0.50	3.48 0.59
10生（73）	3.42 0.81	3.77 0.45	3.37 0.61	3.60 0.64	3.75 0.46
部局別（102）					
経済・経営学研究科（36）	3.53 0.80	3.75 0.49	3.56 0.50	3.72 0.51	3.72 0.51
生物資源学研究科（43）	3.49 0.66	3.67 0.56	3.33 0.56	3.56 0.54	3.65 0.52
看護福祉学研究科（23）	3.35 0.76	3.65 0.48	3.04 0.62	3.35 0.76	3.70 0.46

1.4.2 授業公開

全部局の実績一覧を以下に示す。その詳細は2章「各部局のFD活動」にて報告する。

2010年度授業公開一覧

学期	部局	授業名	担当	公開期間	参観数
前期	海洋生物資源学部	生物資源統計学	小北智之 講師	6月28日	8名
	看護福祉学部	精神臨床看護学	三上勇氣 講師	5月20日	4名
		社会福祉調査A	塚本利幸 准教授	随時	0名
		精神医学I	大森昌夫 教授	随時	0名
		社会福祉援助技術演習	舟木紳介 講師	7月15日 7月22日	1名
	学術教養センター	日本の文化と社会	学術教養センター教員	全14回	毎回1～数名
		東南アジアの文化と社会	津村文彦 准教授	7月1日	多数
後期	経済学部	生産管理論II	木野龍太郎 准教授	1月17日	4名
	海洋生物資源学部	動物生理学	末武弘章 准教授	11月29日	5名
	看護福祉学部	母子看護学概論（小児）	赤川晴美 准教授	随時	0名
		母子保健学	赤川晴美 准教授	随時	0名
		老年看護技術論	寺島喜代子 准教授	随時	0名
		看護倫理学	高鳥眞理子 教授	随時	0名
		解剖生理学	本田和正 教授	随時	0名
		精神看護学概論	田嶋長子 准教授	随時	0名
		成人急性看護学	高原美樹子 教授	随時	0名
		看護管理学	交野好子 教授	随時	0名
		看護教育学	月僧厚子 講師	随時	0名
		基礎看護技術	長谷川小眞子 講師	随時	0名
		看護学原論	高鳥眞理子 教授 笠井恭子 講師	随時	0名
		母子看護学概論（母性）	交野好子 教授	随時	0名
		基礎保健学	垂水公男 教授	随時	0名
		公衆衛生・環境医学	垂水公男 教授	随時	0名
		看護学研究	月僧厚子 講師	随時	0名
		社会学概論	塚本利幸 准教授	随時	0名

学術教養センターでは前期110科目、後期168科目を随時公開とした。

1.4.3 FD 研修

学内研修および学外の研修実績を一覧にして示す。それぞれの詳細は2章「各部署のFD活動」にて報告する。

2010 年度 学内研修一覧

テーマ	講師等	開催形式	開催日	参加数
FD座談会	生物資源学部教員	座談会	6月1日	16名
公開授業と授業改善の取り組み	学術教養センター 津村文彦 准教授 ほか	研究会	7月15日	多数
基礎ゼミ担当者懇談会	経済学部教員	懇談会	7月21日	14名
吉林大学学術交流講演会 ・「Emergency medical service system and emergency nursing in China」 ・OSCE applied in nursing education	吉林大学教員	講演会	7月28日	教員22名 学生40名

2009 年度 学外研修一覧

参加イベント	主催者	日程	出張先	参加者
FD合宿研修会	Fレックス主催	9月3日～ 4日	冠荘（池田町）	生物資源学部 黒川 洋一 講師 学術教養センター 山川 修 教授
「学習評価・GPA、学士力保証」 研究会	Fレックス主催	1月28日	仁愛女子短期大 学	学術教養センター 菊沢 正裕 教授 徳野 淳子 講師

2. 各部局のFD活動

FD活動は2008年後期より部局主体で企画実施するようになった。それは、部局によってFDの意義が異なり、またその理解や普及の度合いも異なることが明らかになったためである。以下に、各部局の活動成果を部局担当者がまとめた。

2.1 経済学部（飛田正之・境宏恵）

経済学部の本年度のFD活動は、定例の「授業評価」と「授業公開」を中心に行った。これに加え、新たな活動として、「基礎ゼミ担当者懇談会」を開催した。「基礎ゼミ」（2年次前期必修科目）は3，4年次の「演習」の導入的役割を担う科目となっており、担当教員間での教材、教育方法などの情報共有、また今後の課題について検討する必要がある、懇談会を開催した。以下、「授業公開」「基礎ゼミ担当者懇談会」の概要を報告する。

2.1.1 授業評価

- ・2005年度前期の評価が著しく低いことをのぞいては、おおむね安定した推移を示している。
- ・前期授業の評価よりも、後期授業の評価の方がやや高い傾向が見られるが、その理由についてはこの結果だけからでは判断することはできない。ただ、前期と後期の授業環境の相違点として、前期に比べて後期の授業数が少ないこと、セメスター制を導入しているとはいえⅠ・Ⅱとして前期と後期で連続的に開講している授業が存在すること、学生の授業への慣れ等が存在する可能性がある。
- ・他学部および一般教育の評価と比較すると、内容、関心、総合ともに、評価の水準はやや低い傾向が見られる。とくに内容面の評価は低い傾向が見られる。評価が低い原因の一つとして、経済学部の授業の多くが大講義形式によっていることがあげられると思われる。しかし、詳細については、学年別、講義形態別、教室規模別などによって区分し、丁寧に検討する必要があると思われる。

2.1.2 授業公開

経済学部は、次のとおり、後期1コマの授業を公開した。その詳細については、以下のとおりである。

授 業 名： 生産管理論Ⅱ

日 時： 2011年1月17日（月） 講義 10:40-12:10 検討会 12:15-12:45

担 当 者： 木野龍太郎准教授

受講者数： 約13名

参加教員： 経済学部 清水葉子准教授、飛田正之准教授、中里弘穂准教授
境宏恵准教授

概要

10:42 小テスト配付

10:45 解答開始

10:53 解答終了，自己採点，解説，回収

10:59 新聞記事資料の説明（OHC の利用）

11:08 補足解説（パワーポイント，写真，映像資料の利用）

11:18 新しい内容の講義（板書）

- ┌ 発注方式：複社発注と 1 社発注
- └ サプライヤー選定基準
- └ 人事・労務管理の目的

12:10 講義終了

ディスカッション

- 小テストを出席票代わりとして利用されている。その際、「解答開始の合図をするまでは受け取れる」というルールとされているので，遅刻してきた学生は出席票を受け取れず，結果として遅刻者が少ないという効果をあげている。また，解答終了後，自己採点をした後に回収されている。すべて教員が採点する方式だと手間がかかって実施に二の足を踏むが，この方式であれば小テストを毎回取り入れやすいので参考になった。
- 登録者数は，生産管理論Ⅱが 20～30 人程度で，Ⅰは 70～80 人とのこと。内容も，就職活動や企業活動など，学生の今後に大いに役立つものであり，授業の進め方も工夫されている魅力的な授業なのに，どうしてこんなに受講生が少ないのかが不思議である。この理由について，科目が社会にどう結びついているのかを学生自身が理解できていないのではないかと，生産管理は理系の仕事であって文系の人間には関係ないと思っているのではないかと，という意見が出た。また，この対応策として，導入的な内容を持つ総論的な授業でオムニバス講義を行って学生に科目の内容や位置づけを周知する機会が必要ではないかとの意見も出た。（なお，現 1，2 年生は経営学総論でこのような機会を得ているが，現在の受講生である 3，4 年生にはこのような科目を紹介する機会はなかった。）また，科目間の連携を積極的に進め，講義の中で「この点について勉強したい人はこの科目を勉強するとよい」などという形で紹介するとよいのではないかと。
- 映像資料（写真，動画）と新聞記事が効果的に用いられていた。現場を知らない学生にとって貴重である。これらの資料については，担当の木野先生が調査に行かれたときに入手されたり，社会人大学院生等の協力を得たりして集められているとのことであった。また，日頃からビデオを意識的に利用するようにされているとのことであった。
- 授業の中で出てきた用語のうち，学生にわかっていないものがあるのではないだろうか。わからなかったら自分で調べてくるようにという指示・確認があったらよいので

はないか。

- 板書は量・内容ともにまとまっており、アンダーライン等も付されていて、見やすい。ただし、板書に時間がかかる分内容が少なくなるという制約もあり、本当はもう少し基礎+ α のレベルまで持って行きたい、とのこと。
- テキストは買ってほしいが、テキストを振り返るとなるとその分時間がかかる。学生がテキストを買わない理由として経済面の制約があげられるが、この点については、親に学費以外にテキスト代が必要であることを情報提供すべきかもしれない。また、近年の学生は人間関係が希薄化しているのか、先輩からお下がりでもらったり、隣の人に見せてもらったりするということも減っているようである。その一方で、「テキストを買えば単位を取れますか」という質問が来るなど、単位とテキストを直接的に結びつけて考える傾向もある。
- なるべく就職活動とつなげて話したり、福井の産業構造と結びつけて話したりするなどの工夫をされているとのこと。
- この授業を聞くことにより、サプライヤー側と購買側の双方の視点が存在することを再認識することができるのは、意義深い。

2.1.3 基礎ゼミ担当者懇談会

経済学部では、学部専門科目（2年次配当，2単位，前期開講）として、学科ごとに基礎ゼミを必修科目と位置づけている。当該科目は経済・経営両学科をあわせて20名の教員によって担当されている。また、学生は、各人の希望を考慮した上で、抽選によって各基礎ゼミに配属され、15名程度を定員としている。

従来、基礎ゼミの講義内容については、各教員にゆだねられていた。しかし、学生との緊密な関係を構築する上で演習科目の重要性が近年高まっている上に、各教員に共通する問題が発生している可能性もある。そのため、一度担当者間で情報を共有する必要があると考え、このたび初めて担当者間での懇談会を開催することとなった。懇談会の概要については、以下のとおりである。

日時：2010年7月21日（水）16:50～18:00

場所：経済学部教授会室

参加教員：14名

懇談概要

- ・各担当者からの担当ゼミの概要報告

教材，テーマ，資料収集，レジュメ作成，ディスカッション等について報告された。

- ・今後の「基礎ゼミ」教育のあり方について

今後の「基礎ゼミ」教育のあり方について意見が出された。

2.2 生物資源学部（黒川 洋一・加藤 久晴）

生物資源学部における今年度のFD活動は、例年どおり授業評価と授業公開を中心に行われた。授業公開の方針は、原則すべての講義を公開とし、参観自由としたが、今年度は該当するものがなかった。よりよい授業を目指して知恵を絞る試験的な試みとして、今年度は、「FD座談会」を開催したほか、学科内の会議やメーリングリスト等を通じて、現代っ子学生気質を把握し、教育改善に役立てるための議論の場が増えている。

2.2.1 授業評価

前期に関しては、昨年度以降「内容」「関心」「総合」いずれも評価が低下傾向にあり、特に「内容」の落ち込みが目立つ。これに対し、後期は「関心」「総合」は安定しているが、「内容」は漸減傾向にある。教員の入れ替わりも多くなき授業評価に基づいて各教員は継続的に授業改善を試みているにも関わらず、特に「講義内容の理解」を反映する「内容」の数値低下に関して、いくつかコメントし(①,②),また、この現状の対応として検討中の事項を述べる(③)。

①テクニカルな点について

必修科目が多い前期では、不真面目な学生も受講者の中に多く含まれ、選択科目が多い後期では比較的真面目な学生が多いため、相対的に後期の評価が前期に比べて高くなるのかもしれない。

受講態度の悪い学生（欠席・遅刻が多い、成績が悪いなど）が意図的に低い評価をしている可能性があり、「理解度」と成績等の関係も調査する必要があるかもしれない。

（一般教育では安定した評価を保っているが）、一般教育は全学部の学生（1・2年生中心）によるものなので、生物資源学部の学生だけによるデータにも関心が持たれる。

②学生気質の変化、あるいはそれに伴う授業方法のあり方からの解釈

・学生の意欲の低下、主体性の欠如、理解力の低下など、学生の入学前からの問題点が露出していると考えられ、教える側ばかりではなく、学ぶ側の問題を把握することも必要ではないか。

・出席率の低下（上記の内容の他、講義を5回までは休んでも良いという空気が原因か）。
・「理解度の低下」には、自ら考える姿勢が必要な大学の講義についてこられないという「伝統的解釈」に加えて、「現代的解釈」も必要なのではないか。すなわち、現在の学生たちの一部は（スーパーサイエンススクールSSHなどの制度により）自ら調べたり表現したりする講義を高校までの教育で体験しており、教員が一方的に教える講義に飽きてしまい、ついて来られないのではないか。

③学生の意欲の向上について

・食糧、健康、あるいは環境などの問題を解決するために、生物資源学部で学ぶことがどのように役立つかを自ら調べさせる講義を将来的に導入したいと考えている。主体的に学

ぶ助けになるものと思われる。

2.2.2 授業公開

今年度は該当なし。

2.2.3 FD 座談会

今年度、試験的に開催した「FD 座談会」は、スタディスキルの伝授もさることながら、最新の学術的成果、教育や研究に対する教員の思いをいかに学生に伝え、関心を持たせるきっかけを作るかという点について、教員の意見や知恵を集約しようとするものである。今年度は、学生全員が履修すべき「必修科目」を中心に議論した。

また、今年度は、学生の現状を議論したり情報共有しようとする機運が高まり、講義や実験あるいは実習中の学生の現状報告を会議やメーリングリストで頻繁にやり取りするようになった。このことは学生気質の理解やそれに対する指導工夫に関して建設的に議論するのに有効と考えている。

今後、講義および学生実験等において、他講義との連携を考慮した講義設計を行うにあたり、このような教員間の自由闊達な意見交換の場は、昨年度作成した授業科目の「一覧表」および「フローチャート」と併せて、有効な手助けになると思われる。以下、「FD 座談会」の概要を、学生意識の理解、講義上の工夫などの観点からまとめて報告する。

「FD 座談会」

日時 平成 22 年 6 月 1 日 10:00～11:30

場所 生物資源棟 1F 会議室

発表者：黒川、日弁、加藤、大田、大東（敬称略）

参加者：大東、宇多川、大田、村井、吉岡、岩崎、石川、林、三浦、高橋、濱野、日弁、伊藤、植松、加藤、黒川（敬称略、16 名）

【プログラム】

はじめに 10:00-10:05

10:05~10:20 「導入教育はなぜ必要？ー一年生向け講義を担当して」 黒川

10:20~10:35 「生物資源学部生はクローン羊の夢を見るか」 日弁先生

10:35~10:50 「応用生物学実験Ⅱを担当して」 加藤

10:50~11:05 「もっとアナログに、もっと主観的に」 大田先生

11:05~11:20 「県立大学の講義で思うところ」 大東先生

フリーディスカッション 11:20-11:30

終わりに

【フリーディスカッション】

「学生のしつけに関して」

1 年次に講義や実験に臨む姿勢をしっかり身に付けさせる（躰）必要があるが、今はその役をしてくれる教員がいないのでは、という問題提起に対して、現在、1 年生向けの専門講義は 4 科目（化学 I, II・生物 I, II）しかない上、特定の先生だけに任せる訳にはいかず、各先生自身にも躰ける意識が必要ではという意見が複数あった。学生は、楽な先生、そうではない先生をちゃんとかき分けているとの発言もあった。今の学生は怒られた経験が少なく、叱り方が難しい、他大学ではきつい言葉を発して大変な問題になった事例があったなどの発言も。

「遅刻に対して」

講義の途中で入室するのなら、むしろ欠席してもらいたい、雰囲気が悪くなるとの発言や、講義で出席をとるようになってから遅刻者は減ったが、遅刻者に対してはそれほど厳しい対処はしていない、ただし、実験での遅刻には厳しく対処し、遅刻しにくい雰囲気を作っているなどの発言があった。生物学実験などでは、躰けるのではなく、学生が自分で勉強するという気持ちを引き出してあげることが重要で、例えば、添削したレポート等を速やかに返すと、学生側もちょうとした反応を見せるとの発言もあった。

授業の最初に、前回の復習や講義のポイントなどの大事な話をするなどで、遅刻防止の試みをしているほか、出席回数は学生自ら管理するよう、また、出席不足に関する対処追試はしないことを最初に宣言しているなどの発言もあった。

「講義の仕方に関して」

国立大学では、講義は 15 回行い、試験は 16 回目に行うように変わってきており、県大もいずれは対応する必要があるとの指摘があった。年間スケジュールの関係で講義回数を増やせないような場合は、講義を 90 分から 100 分に延長するなどのアイデアも出された。

一般教養の授業で、講義の途中で休憩を入れている場合があり、学生には評判であるとのこと。（今の学生の集中力が 90 分間もたないので）全学でもその検討をしてはどうかとの意見があるそうだ。教員が一方的に話をすることが多い講義（大人数講義）では、学生にとって休憩があったほうが良いのかも知れないとの発言もあった。

「新しい形の講義の提案」

学科長から、近未来（10-20 年後）の日本に必要なモノについて、学生だけでなく、教員も一緒に考え、調べていくスタイルの講義が提案された。たとえば、持続可能資源を供給する技術を考える、食の歴史と文化を調べるなど。そのような技術を実現するには、さまざまな知識が必要となること、そして生物資源学科のさまざまな講義内容が大切であることを学生に気付かせ、個々の授業を受けることへのモチベーションが高まることが期待されるとの発言があった。

これに対し、確かに学生は、教員から与えられたことだけを勉強するスタイルに慣れきっており、自主学習こそが大切という意識が弱いため、自分で調べる機会の提供はとても

大切である、他学部に比べて生物資源の学生は予習、復習をしていない者が多いとの統計を見たこともあるなどの発言があった。

調べる時のモチベーションは、学生が将来自分の進みたい分野の開拓にもつながるほか、その分野でどのような人材が求められているのかも把握できるだろうとの発言や、時間をかけ、しつこく学生のモチベーションを高める講義内容を工夫すべきではないかとの発言があった。

導入教育としては、学生が一つのキーワードをきちんと調べられるよう、教員が手助けしながら丁寧に指導する過程で、生物学、化学の区別無く講義が大切であることを分かってもらえるのではという発言があった。

【まとめ】

学部長からは、学生にいかに興味を持たせるかを各教員が努力工夫していることがわかった旨、およびメディアで紹介される情報や記事、身近に観察される自然現象などと、学生が学んでいることとの関連を講義の冒頭で紹介し、興味を持たせることが真面目に受講させるためには大切である旨のご発言があった。

学生が自発的に学ぶためには、一方的に教え込むばかりではなく、将来との関連などから、生物学や化学を含む、さまざまな基礎的な勉強が大切だと自覚するような仕組みが重要であると思われ、その形の実現に向けて今後も議論を続ける予定である。学生が自発的に学ぶようになるには時間はかかるが、導入教育などで丁寧に指導する必要がある。生物資源学が様々な問題を解決する学問であること、およびその将来性を理解する上で、学生がスタディスキルを活用して主体的に調べたり、意見を出し合ったりすることは重要なアプローチになると思われる。

学生に関心を持たせるための多様な工夫が紹介されたが、講義は各教員の個性と努力の上に成り立ったものであり、それぞれの工夫を尊重しようとの考えが大方の合意ではなかろうか。今回寄せられたノウハウは、各教員が授業改善への取り組みにおいて自由に参考にすべきものであると考えられた。

また、今回のような座談会を持てたことで、学生の学習意欲を引き出すための教員の意識が高まったと思われる。形式にはこだわらないが、今後も必要に応じてこのような取り組みが望まれる。

2.2.4 FD研修

以下のF-レックスの研修事業であるFD合宿研修会に参加した。

日 時 2010年9月3日～4日

会 場 冠荘（池田町）

参加者および報告者 黒川洋一 講師

FレックスのFDチーム企画による、第1回の合宿研修会に参加した。「初年次教育、ポ

ートフォリオの取り組み」（福井工業大学・島田幹夫先生，福井大学・本田友己先生報告）および「アンケートから見る福井県の学生の特徴」（京都大学高等教育開発推進センター・溝上慎一先生報告）を中心に報告する。

学びの大切さを学生に気づいてもらうことが，言葉では簡単だが，現実はいかに難しく，また工夫が必要であるかと実感した。福井工業大では，教員との自由な対話を通じて，学生に教員の知識や経験を伝える講義を取り入れているという。福井大学では文科省のプログラム（GP）を通して，グループワークを行ったり，高大連携を利用して学生が教える側に立つ実践も行っているそうであり，後述する「ジェネリック・スキル」を重視しているという。

また，福井県の学生の特徴をアンケート結果から解析した報告では，「学び」だけではなく，学外活動や交遊などの時間の使い方による，学生の分類の仕方が新鮮であった。「よく遊び，よく学ぶ」適応力の高いタイプ，「何に関心を持っているのかよく分からない」適応力が低いタイプなどに分類され，後述する「ジェネリック・スキル」の習得能力もこれらのタイプにより異なるという。

全般を通して取り上げられた概念が「ジェネリック・スキル（汎用的技能）」である。これは，コミュニケーション・スキル，数量的スキル，情報リテラシー，論理的思考力，および問題解決力を含む，全ての学生が将来にわたって身につけるべき基本的能力のことを指し，専門的な知識や能力とは異なる物である。「よく遊び，よく学ぶ」タイプは，大学教育を通じて「ジェネリック・スキル」を身につけ，成長することができるという，溝上先生の解説があった。適応力が低く，将来の見通しを持っていないタイプの学生は自らの姿勢を急に変えることは困難なため，将来展望を持たせるような「キャリア教育」が必要との発言もあった（溝上先生による）。

この研修では，教員が熱意を持って，学問の魅力やその将来性を学生に伝えたりすることの重要性を改めて認識したほか，学生が自ら調べたり発表する講義の具体的な実践例を学ぶことができた。これらの内容は，生物資源学部で行われたFD座談会で議論し，共有意識を持った内容との一致性が高いと思われる。また，学ぶ意欲の向上や「ジェネリック・スキル」の定着に関する工夫も大変参考になった。

2.3 海洋生物資源学部（大竹臣哉）

2.3.1 授業評価アンケート

- ・ 前期，後期で経年変化の傾向が異なるように見受けられる．
- ・ 前期の場合，関心に対する評価は低い，内容に対する評価は経年的には下がったものの，他学部に比べ高く，総合も高くなっている．
- ・ 後期の場合，内容，関心，そして総合も減少傾向になっている．この傾向は，他学部でも同様の傾向が見られるが，減少率が他学部に比べ高いように見受けられる．
- ・ 年次別のアンケート結果が出ていないのでわからないが，年次別で違いがある場合，学習意欲が大きく落ち込む年次があることになり，成績等に反映されていないかチェックが必要となると考えられる．

2.3.2 授業公開

本年度の海洋生物資源学部 FD 活動では，授業評価および授業公開を行った．以下，授業公開について活動を報告する．

海洋生物資源学部 海洋生物資源学科 授業公開報告（平成 22 年度前期）

実施月日 2010 年 6 月 28 日（月）2 限

場 所 小浜キャンパス LL 教室

科目名 生物資源統計学（必修科目）

担当教官 小北 智之先生

対象学生 海洋生物資源学科 3 年生（当日出席者数 名）

参観者数 8 名（大泉徹，大竹臣哉，宮台俊明，青海忠久，横山芳博，高尾祥丈，兼田淳史，末武弘章）

（1）参考になった点

- ・ 説明の後に実例を出して実際に操作させる方法が非常に有効であると感じた．
- ・ 宿題を課すことも有効．
- ・ 立って話すことが大切と感じた．
- ・ 説明のとき，学生は説明を良く聞いているように感じた．
- ・ 席が適当に離れていて，マメに作業を組み入れているので，だれた感じがしなかった．
- ・ 課題の使い方が適当だった．
- ・ 手元のパソコンで学生の進捗を確認できる点がよい．
- ・ 説明で自分たちのテスト結果を用いて統計処理を行ったことは，興味を引く方法としてよいと感じた．
- ・ 宿題を出している点は良いと思った．（2 件）
- ・ 実際の使い方から理屈へつなげる授業の展開は学生になじみやすいのではないと思った．
- ・ ステップバイステップで進めている点はよいと思う．

- ・ 図解もわかりやすい.
- ・ 演習形式は良いと思う.
- ・ LL 教室で実際に学生にパソコン操作をさせながらの授業を行う方法について参考になった.
- ・ 丁寧でポイントをつかんだスライドがよい.
- ・ 難しいテーマを要領よくまとめられている.

(2) 改善余地があると感じた点

- ・ PC のウィンドウ切り替えが激しくなるときがあるので、少し気に留めておく必要があると感じた. (2 件)
- ・ パソコンの操作中の説明は声がさえぎられて聞こえにくい. マイクを使うことを薦める. (3 件)
- ・ 一番後ろでは、声が聞き取りにくい. 特に教員が着座しているとき.
- ・ ホワイトボードが見えにくい. (2 件)
- ・ 学生たちは自分で考えて実行するというより、先生の真似をしているように感じた.
- ・ 授業時間を短くしてもらったせいか、授業がやや一方的な進め方になっている感じがした.

(3) そのほか、気づいた点・疑問点

- ・ パソコンの操作には個人差あるので、最初は少し余裕をもったほうが良い. (3 件)
- ・ 学生の座る場所は決めているのか? といった疑問を持った.
- ・ 大切な項目をパソコン上に吹き出しするなど示したらどうか.
- ・ 反復練習が必要な科目なので、自分で予習・復習できる教科書が必要と思う. あるいは、参考書、問題集でもよい.
- ・ 大人数の必修授業でご苦労も多いでしょうが、宿題などの工夫をされている点が良いと思う.
- ・ 非常に分かりやすく感じた.
- ・ 巡回モニター、ロック機能など LL 教室の長所を利用していることは参考になった.
- ・ 理解度の低い学生をどのようにするか? といったどの科目でも抱えている問題が改めて感じられた.
- ・ 先生の話ノートに書き留めたいが、プリント、画像、そしてノートと学生にとって目まぐるしく媒体が変化しまとめにくさを感じた.

(4) 今後の授業公開への意見

- ・ 次世代(助教)の参加がのぞましい.

(5) 担当教員のコメント

今回初めて授業公開を担当したが、参観された方からのコメントの中には自分では全く気

づいていなかった点があり（後ろのほうでは声が聞き取りにくい、PCの切り替えが激しい時がある）、非常に参考になった。今後改善していきたいと考えている。その他のコメントに関しては（例えば、ホワイトボードが見えにくい等）、自身で既に感じていることであったが、施設面の問題でもあり、今後、LL教室を授業がしやすいような構造に改造していただければありがたい。最後に、大変お忙しい中、参観して頂いた上に、ポジティブかつ建設的なコメントを頂いた皆様にお礼申し上げたい。

海洋生物資源学部 海洋生物資源学科 授業公開報告（平成22年度後期）

実施月日 2010年11月29日（月）1限

場 所 小浜キャンパス 203教室

科目名 動物生理学（必修科目）

担当教官 末武 弘章先生

対象学生 海洋生物資源学科2年生（当日出席者数 51名）

参観者数 5名（松川雅仁、神谷充伸、大竹臣哉、宮台俊明、青海忠久）

（6）参考になった点

- ・ 授業の構成がしっかりとしている。
- ・ 授業開始時に内容の大枠を話しているため、授業内容を理解しやすい。
- ・ 取り上げている項目が新鮮で分かりやすく、学生に無理を強要していない。
- ・ 説明がとても上手で分かりやすかったです。月曜1時限目というのに出席率が高く、殆どの学生は熱心にノートを取っているのが印象的でした。
- ・ スライドも短い言葉でまとめて、ノートをとりやすくしているのに加えて、写真をふんだんに使って興味を引き立てているのが参考になりました。
- ・ スライドが図と写真とキーワードで構成され、良くできていると思います。
- ・ 使う例が日常的なもので理解しやすい。
- ・ 受講生との対話もよく、説明が丁寧で具体的な点が印象的でした。
- ・ 学生の身近にある具体例をあげて、分かりやすく説明しています。（2件）
- ・ 質問を入れながら授業を進めています。
- ・ スライドが見やすい構成になっています。
- ・ 質問を適度に入れて、緊張感を持続させる工夫が印象的でした。

（7）改善余地があると感じた点

- ・ 理解度を時々チェックしたほうがよいかもしれません。
- ・ スライドの写真が暗くて見えにくかったです。
- ・ 前側のカーテンを閉めると効果があるかもしれません。
- ・ 写真や図が見えにくい箇所がありました。特に図では軸の説明がないので、わかりづらいところがありました。
- ・ 図は写しきれっていないので、資料として配布したほうが良いかと思います。

(8) そのほか、気づいた点・疑問点

- ・ 1年目の授業なのでとても大変だと理解しています。途中で休みを入れるとか、もう少し余裕を持った授業でもいいのかもしれない。
- ・ スライドの数がずいぶん多いように感じましたが、学生は消化不良になっていないでしょうか。
- ・ 受講生の疑問などをどのように吸い上げ、理解を深めさせるのか、あれば教えてください。
- ・ 期末試験だけではなく、レポートを課したり、小テストを実行したりして学生の理解度を確認する工夫があってもいいかもしれません。

(9) 担当教員のコメント

コメントを下された先生方に感謝致します。また、このような機会を提案して下さったことに感謝致します。先生方にいただいたコメントをもとに授業の改善に努めていきたいと思ひます。そのためには、学生がどの程度授業を理解しているのかを把握しておくことが大切であることがわかりました。

① 理解度のチェック

これについては頭を悩ませています。多くの先生が小テストやレポート、あるいはアンケートをとることで学生の情報を丁寧にモニターしていることがわかり、大変参考になりました。私も何らかの方法で対応するようにしたいと思ひます。

② スライドが暗くて見えにくい。

コンピュータ上では鮮明に見えていますので、プロジェクタの光量が弱いのかもしいないと思ひ、教務に改善の要望をしています。それと同時に今後はスライドの写真は明るくわかりやすいものを選ぶようにしたいと思ひます。カーテンも閉めます。

③ 図がわかりにくい

図についてはスライド上と口頭の両方で軸の説明を入れるようにします。また、教科書に載っているものについてはページ数を示すようにします。また、それ以外のものについては資料を用意することも検討したいと思ひます。

④ 内容量が多すぎる、余裕が必要

授業の内容量が多いかどうかについては自分ではわかりませんでした。標準的な教科書(魚類生理学の基礎)の中からとくに重要な概念だけを抽出して示しています。学生たちがどれくらい理解しているかを把握して対応したいと思ひます。

2.4 看護福祉学部（本田和正，塚本利幸）

看護福祉学部で本年度に実施した FD 活動は授業評価，授業公開，FD 研修（学内）である．以下にその詳細を記述する．

2.4.1 授業評価

本学部の前期の平均値(3.点検と課題の図1)は2009年度から2010年度にかけて「内容」，「関心」，「総合」の3項目とも大きく低下している．本学部で多数実施されているオムニバス授業が前期では評価に参加できなかったため，このことが結果に影響した可能性が考えられる．後期の本学部の平均値(3.点検と課題の図2)では「総合」と「関心」は変化がみられなかったが，「内容」が前期と同様に低下している．学生の質の低下を反映している可能性が考えられるが，一般教育科目では「内容」の低下が認められないので結論はできない．いずれにせよ本学部では「内容理解度」が他の項目より低く，今年度はその傾向が更に強まっているので，よりわかりやすい授業を目指して授業を改善していくことが必要である．

2.4.2 授業公開

2010年度の授業公開は以下の方針で実施した．

看護学科

前期はこれまで通りチーム員からの依頼による授業公開を2件程度実施することとした．後期は，授業公開を含むFD活動のあり方について学科でアンケートを実施し，その結果をもとに授業公開は公開可能な科目について随時公開とした．

社会福祉学科

これまで通りチーム員からの依頼による授業公開を前期3件，後期1件実施した．内，3科目は随時公開とした．

これらの方針によって実施した授業公開は，前期4件（看護学科は依頼による公開が1件，社会福祉学科3件），後期1件（看護学科は0件，社会福祉学科1件）であった．

2.4.2.1 実施概要

実施概要は表2.4-1のとおりである．

表 2.4-1 2010年度授業公開（看護福祉学部）

月日（曜日）学期	時限	講義名	教員名（学科）	教室	学生数(学年)	参観者数
5月20日（木）前期	1	精神臨床看護学	三上（看護）	L209	56(3)	4
随時（火）後期	2	母子看護学概論（小児）	赤川（看護）	L210	56(2)	0
随時（火）後期	2	母子保健学	赤川（看護）	L113	56(2)	0
随時（火）後期	3	老年看護技術論	寺島（看護）	L210	56(2)	0
随時（火）後期	3	看護倫理学	高鳥（看護）	L212	55(4)	0
随時（火）後期	3, 4	解剖生理学	本田（看護）	L208	50(1)	0
随時（火）後期	4	精神看護学概論	田嶋（看護）	L210	56(2)	0
随時（水）後期	1, 2	成人急性看護学	高原（看護）	L111	56(2)	0
随時（木）後期	2	看護管理学	交野（看護）	L209	55(4)	0

随時 (木) 後期	3	看護教育学 月僧 (看護) L209 55(4)	0
随時 (木) 後期	3, 4	基礎看護技術 長谷川 L210 50(1)	0
随時 (木) 後期	3, 4	基礎看護技術 笠井 L210 50(1)	0
随時 (金) 後期	2	看護学原論 笠井 L209 50(1)	0
随時 (金) 後期	2	母子看護学概論 (母性) 交野 (看護) L210 56(2)	0
随時 (金) 後期	2	看護学原論 高鳥 (看護) L209 50(1)	0
随時 (金) 後期	3	基礎保健学 垂水 (看護) L110 55(1)	0
随時 (金) 後期	4	公衆衛生・環境医学 垂水 (看護) L107 54(1)	0
随時 (金) 後期		看護学研究 月僧 (看護)	0
随時 (月) 前期	4	社会福祉調査A 塚本 (社福) L112 36 (2)	0
随時 (月) 前期	4	精神医学 I 大森 (社福) L210 (1)	0
7月15日 (木) 前期	1, 2	社会福祉援助技術演習 舟木 (社福) N210 30(3)	0
7月22日 (木) 前期	同上	同上	1
随時 (水) 後期	3	社会学概論 塚本 (社福) L209 30(1)	0

社福；社会福祉

2.4.2.2 実施教員による授業公開の報告より

(1) 精神臨床看護学 (看護学科)

実施月日：2010年5月20日 (木) 1限

場所：福井キャンパス L 209 教室

科目名：精神臨床看護学

担当教官：三上勇氣 講師

対象学生：看護学科3年生

学生数：56名全員

参観者数：4名

授業公開調査票の結果

【参加教員の意見】原文のまま

(1) 参考になった点について、お書きください

- ・学生の反応を見ながらの話し方は大変参考になりました。
- ・プリント資料は大変丁寧に準備されていると思います。
- ・前回授業の疑問点を学生に書かせ、Q & Aとして次の授業のプリントに添付しておられるのは大変良いと思います。この辺のことは学習支援ツールを使用すれば印刷等の手間が省けるかなと思います。
- ・学生の集中力が落ちてきたところでの質問は非常に効果的だと思いました。
- ・90分を通して学生の身近なことがらを具体例にして、理解を助け、集中力を刺激していた点が良かったです。実際に、学生は先生の説明する内容に集中できていたように見えました。
- ・説明が丁寧でわかりやすかった点が良かったです。

- ・配布資料も丁寧で、概念を簡潔にきちんと説明した内容なので、学生が長く活用できる資料となるのではないのでしょうか。重要な概念について、網羅されていました。
- ・話す速さは、大変聞きやすかったです。精神看護学で用いられる用語は難しいのですが、わかり易い例えでした。
- ・学生の様子もよく見ていましたね。しかし、難しい内容なのでボーとしているのも致し方ないところがありますね。私は実際の症状と説明が良くつながり、とても面白く感じていたのですが体験しないとわからないことをわかりやすいように説明していたと思います。ときどきユーモアを交えて、学生の気を教員の方に持っていついていたところが良かったです。うまいですね。これはなかなか真似ようとしても難しいです。
- ・精神障害者の看護を基礎の段階で学ぶというのは学生は対象のイメージが持ちにくいという難点があることが分かりました。そのため、いかに教員がイメージを伝えるか、具体例を交えていけるかが鍵になると感じました。その点、先生は豊富な臨床経験を背景に話をされていることが分かり、説得力がありました。また学生の日常レベルでの例をあげることや図、絵を多用することで理解を促す工夫をしていることも分かりました。私は授業した経験がないので、講義というと、ひたすら資料にそって教える、説明するというイメージでした。しかし、先生のやり方を見ていて、50名という多人数を相手に、よく対話をされていることに感心しました。ただ聞いているだけでは沈滞してしまう時間を、少しでも関心を高めたり、維持したりするにはとても効果的だと分かりました。また、先生の動きがあること、学生も動くことは大切だと分かりました。

また当然のことですが、講義内の専門知識が教員に確実に蓄積されていることが、学生として安心して聞いていられたり、教員への信頼の上で話が聞けたりする上で欠くことができない条件であることが実感できました。

(2) 改善の余地があると感じた点について、お書きください。

- ・講義プリントが丁寧に作られているため、メモをとっている学生が少ない印象を受けました。プリント資料をもう少し簡略にしてメモをとらせる工夫があっても良いかなと思います。
- ・話し方はおおむね大変参考になりましたが、途中で少し早口になる傾向があったと思います。
- ・遅刻者への対応の工夫が必要かもしれません。1限目なのでやむを得ないかもしれませんが。
- ・授業前半で精神疾患の障害を認知、行動面から説明しておられました。そのような障害のためにどのような困難な状況に陥り、ストレスとなり再発（あるいは日常生活での困難さ）するのかというところまで膨らませておくと、後半（リハビリテーションとしての集団療法やその理論背景）を学ぶ動機づけがより強まったかもしれないと考えてみました。
- ・心理教育の辺りから、資料と対応していないお話をされる時間があり、「今、どこを話しているんだろう」と気になると、話に集中できないことがあると感じました。

(3) そのほか、気づいた点・疑問点などありましたらお書きください。

- ・解剖生理学の中でこの分野に関連する基本事項はほとんど話していないのが現状ですので、授業に盛り込むことを考慮したいと思います。
- ・私の授業でもそうなのですが、学生は板書されることは写し、資料にはマーカーを引きます。しかし、本当は話していることの方が重要なことを言ってくれていると思うのですが、その部分は全くと言っていいほどメモを取っていません。「今から言う事をよく聞いてください」「ここが大事」と注目させてもいいのかなと思います。
- ・私は慢性疾患看護を専門にしていくつもりですが、今日のお話で活用できる理論や技法が多かったので、またいろいろ教えて頂けると有難いです。

(4) 今後の授業公開を行うにあたって、ご意見がありましたらお書きください。

- ・意見というものでありません。心理学を受けてますよね？と言われていましたが、私も着任して知ってから愕然としたことがあります。学生は、一般教養で看護を学ぶ上で受けておいてほしい科目はほとんど専門科目と時間帯が重なり履修していないのが現状です。実習中に倫理って何？と言われたのには悲しかったです。よって、一から説明が必要です。参考までに。

【担当教員のコメント】

授業をご参観下さいました教員の皆様から、貴重なご意見を頂きありがとうございます。この様な機会はなかなかないので大変勉強になりました。なるべく学生が退屈しないように、反応を見ながら学生との対話を心掛けております。学生にメモを取らせる工夫や重要な箇所の注意づけ、板書の仕方など改善や工夫をしていきたいと思っています。

(2) 社会福祉援助技術演習（社会福祉学科）

実施月日： 2010年7月22日（木）1限，2限

場所： 福井キャンパス L 210 教室

科目名： 社会福祉援助技術演習

担当教官： 舟木伸介 講師

対象学生： 社会福祉学科3年生

学生数： 30名

参観者数： 1名

授業公開の結果

社会福祉技術演習はワークショップ、ロールプレイなどの演習を通して、「地域・コミュニティ」をテーマにソーシャルワークにおける「地域性」と「共同性」の役割と機能について自らの課題として考え、理解を深めることを目的としている。公開した演習は、「地域・コミュニティ」のニーズを把握する意味を考え、その方法を学ぶワークショップの最終回にあたり、学生がグループで模造紙にまとめた「地域住民のニーズを知る方法」を全体会で発表し、プレゼンテーションをコンテスト形式で審査した。その審査員を兼ねて、社会福祉学科橋本教員に見学していただいた。特に本授業のプレゼンテーションは対象を地域住民や地方自治体を想定していたので、担当教員以外の教員に第三者的に審査およびプレゼンテーションに対するコメントを具体的にいただけたことは学生にいい緊張感を与え、

演習へのモチベーションの向上にもつながったと思われる。

授業の進め方に関して問題点や改良点などのコメントは特に寄せられなかった。

2.4.2.3 授業公開の総括

看護学科

前期はチーム員からの依頼で1件の授業公開が実施され、参観者数は4名であった。後期に向けて授業公開を含むFD活動について学科教官にアンケート調査を実施したところ、授業公開は不要であるという意見が多数を占めることが判明した。しかし、一方では担当授業の実施方法について疑問や不安を持つ教官も存在することが明らかとなった。この結果を踏まえて後期には、授業公開が可能な科目について随時公開の形をとることとした。しかしながら、1件の授業公開も成立しない結果となった。今後の方策としては随時公開制をとりながら、参観の義務を何らかの形で付与することが考えられる。また、担当授業に関する問題点、疑問等について学科教官が意見交換する場を設けることも必要であろうと考える。

社会福祉学科

前期はチーム員からの依頼で3件の授業公開が実施され、参観者数は1名であった。連続して参観者がゼロの状況が続いたため、公開授業のうち2つを随時公開とした。しかし、参観者があったのは、学生のプレゼンテーションの審査員を兼ねる形で事前に出席をお願いしていた授業のみという結果になった。後期もチーム員からの依頼で随時公開の形で1件を実施したが、参観者はゼロであった。今後の方策としては随時公開制をとりながら、参観の義務を何らかの形で付与することが考えられる。また、担当授業に関する問題点、疑問等について学科教官が意見交換する場を設けることも必要であろうと考える。

2.4.3 FD研修

本年度実施したFD研修は学内研修が1件であった。

2.4.3.1 実施概要

実施状況は表 2.4-2 のとおりである。

表 2.4-2 看護福祉学部におけるFD研修概要

分類	実施日	内 容	参加者数
学内 研修	2010年 7月28日	吉林大学学術交流講演会 場所 本学 L210教室 「Emergency medical service system and emergency nursing in China」 Song Lihua（主任護師・教授・修士指導教員） 「OSCE applied in nursing education」 Li Kun（博士・講師）	看護学科 4年生 40 名、教員 22 名

2.4.3.2 学内研修

(1) 吉林大学学術交流講演会 報告

日時：2010 年 7 月 28 日（水）14：40～17：05

場所：共通講義棟 L210

参加数：看護学科 4 年生 40 名，教員 22 名 総勢 62 名

講師・講義テーマ

14：50—16：05 Emergency medical service system and emergency nursing in China

Song Lihua（主任護師・教授・修士指導教員）

16：05—16：50 OSCE applied in nursing education

Li Kun（博士・講師）

通訳：藤田 明氏

報告者：堀江

質疑応答：

はじめに宋先生から講義中にあった質問に対し，日本の教員から回答があった．質問は日本のトリアージの色についてであった．

院内ではトリアージはするが色タグはつけない．災害時は中国と同様（教員）

Q1：OSCE を実施することによって，どのような効果が出ているか？（教員）

A：まだ実施しているところが少なく，臨床に出てからの実践能力について実施しているところとしていないところでの比較を行っていないため評価ができない段階である．

（李先生）

Q2：OSCE は中国ではどの程度採用されているのか？（教員）

A：言われる通り，人間的，財政的に問題があると思うが，実際中国で採用されているのは 5 年生の大学だけである．大体採用しているのは 30% ぐらいじゃないか．吉林大学でも 3 年前から導入している．看護学だけではなく医学など他の臨床家の協力も必要である．病気の患者さん役の症状の訓練などは難しい．だから全国的にいい方法と判断されながら研究課題が残っている（李先生）

日本でも卒後の臨床実践能力の低下が大きな問題となっており，OSCE を導入したいが，教員の手間暇を考えると困難だと思っている．後ほどまた質問したい（教員）

Q3：日本でも OSCE や SP を導入するところが増えている．もう少し方法を教えて欲しい．学生数は何名で，一つのテストポイントを何か所の部屋で行うのか？何人の教員が参加するのか？（教員）

A：テストポイント一つに対して，操作そのものだったら 1 人でよいのだが，SP に対応する場合は，模擬患者さんあるいは模擬家族，テストを監督する他の教師（いわゆる SP を指導する人），家族も一人あるいは二人いるという形で，人数は病気によって異なる．テストポイントは全部の学生が通らなければならない．例えば病気が 3 つあったら 3 つ全部通ら

なければならない。全部の学生，1 学年が 90 人なら 90 人が通らなければならない。（李先生）

教員の参加人数が知りたい。（教員）

A：テストポイントに入る前に，どの学生がどの病気にはいるか抽選がある。内科でも学生によって病気が違う。病気の種類によって，家族が必要な時と必要でない時で違う。少なくとも 1 人の学生に対して 3 人～4 人の教員が必要。（李先生）

Q4：先ほどの話の中で，120 番をかけるのは看護師という話があったが，住民はかけないのか？（学生）

A：120 番は誰でも呼び出しができる。先ほどの話は看護師が第一発見者の場合のことである。中国では看護師が地区の見回りをする仕事もある。その際に第一発見者だった場合のことである。

2.5 学術教養センター（朝日百百代・菊沢正裕）

2.5.1 授業評価

まず、巻末の授業評価結果の図（重要項目の経年変化）から次の点が指摘される。

- ・FD開始後数年間評価が向上したのち、4年ほど安定している。
- ・2010年度より評価項目を少なくしたが、特段の変化はみられない。
- ・教員の授業方法に強く関係する「総合」は高い。「関心」や「内容理解」が低いのは一般教育の宿命であるが、そのわりには高いといえる。
- ・前期に比べ後期の評価が高い。1年生の受講が多いので、入学直後の前期より大学の授業に少し慣れる後期の方が高くなる傾向にあると思われる。
- ・一般教育は大人数講義が多いこと、必修科目や選択必修科目を含むことを考えると、高評価と言えよう。

少し詳細にみると、一般教育は大講義室授業が多く「関心」と「内容」の評価値は、ここ4年間、3.0から3.3の範囲で推移している。本学での100人以上の大講義室授業に対する「関心」と「内容」の評価値と、60人以下の小講義室のそれらを比べると、大講義室での評価はそれぞれ3.1および3.0で、小講義室でのそれらよりも共に0.2程度低い。一般教育において、100人以上ときには300人もの学生を対象に、講義内容を理解し、強い関心をもたせるためには相当の創意・工夫が必要であることは言うまでもない。この点で、後述のオムニバス授業「日本の文化と社会」（2010年度前期初開講、教員12名で担当、履修登録数365名）は、毎回300名程度が受講し学生の授業評価も高く、今後の大講義室授業の授業設計や授業運営を改善する上で参考になりそうだ。

2.5.2 授業公開

授業公開は、この3年間随時公開とし、担当教員に事前連絡のうえ参観することを原則としている。2010年度は、このことによる参観報告は提出されていない。この方式は、特段の必要性がなければ積極的には適用されない危惧がある。

一方、県内7大学が参加するフレックスの合同公開授業に学術教養センターの「東南アジアの文化と社会」が選ばれた。また複数教員が参加するオムニバス授業(前期：12名の教員による「日本の文化と社会」、後期：6名の教員による「科学史」)が形を変えた授業公開としての可能性を示唆する結果となった。このうち2件について以下に報告する。

○ 東南アジアの文化と社会

担当教員 津村文彦准教授

公開日 2010年7月1日(木) 1限

参観者 多数（6大学に映像で配信しているため人数は正確に把握できない）

意見交換会（フレックス16回研究会、2010年7月15日）の概要は次の通りである。また当

日議論の詳細は、本学のFDサイトに掲載している。

「合同公開授業と授業研究会」概要報告^(注)

Fレックスとして始めて合同の公開授業を持ちました。公開授業そのものは各校で独自に開催されています。大学を越えての公開授業を持つことにはどのような意義があるのかを検討しました。その中から共通の課題として (1) 大人数講義での授業の工夫はどうしているのか、(2) 独自公開授業がマンネリ化しがち、(3) ICTの活用をどうしているか、が上げられました。県立大学の津村文彦先生の「東南アジアの文化と社会」(2009年7月1日1限目開講 共通講義棟L101にて)を合同公開授業として引き受けていただきました。

この授業では間接参観も実現するため、コミュニティー推進委員に授業のビデオ録画をしてもらい、ネットを通じての参観を実現しました。時間的・場所的な制約のため直接参観できなかった人のためにも機能的でした。

半月後の7月15日に開催した「公開授業研究会」では指定討論者(3名)からの問題提起を受けて活発な討論が展開されました。とりわけ大人数の講義でどのように学生に授業に集中させるかや、資格取得と直接結びつくような講義とのちがい、ひいては知識伝達型の授業と問題考察型の授業との違いと共通点などが議論されました。また、授業でのICTの活用についても議論がありました。

研究会参加者の意見としては、「合同の公開授業とその研究会は各校の独自の公開授業の限界を越える刺激的なものであった」というのが多くありました。また、ビデオ録画による間接参観の可能性も大きいことが指摘されました。現在何名かの先生が自分の講義風景を録画することを試みておられます。

ただ学校を越えて公開してもよいという授業者が多く出てくるような「文化」を生み出す努力が今後必要でしょう。

(注) FレックスFDチームリーダーで福井工業高等専門学校教授 坪川武弘氏による。

同氏の了解を得てFレックス最終報告書17頁より転載

○ 日本の文化と社会

担当教員 津村、北村、木村、宇城、黒田、小林、石原、菊沢、杉村、塚原、中村、徳野
受講者250～300 名（登録者357名うち、全回欠席者47 名）

参観者 全14 回中、毎回1～数名

2010年度初開講の当該オムニバス授業では、毎回の授業について参観した教員と担当教員との意見交換がLMS(学習管理システム)によって自然となされた(28件)。また、授業終盤に、LMS上において学生に授業に対する質問や意見を募ったところ61件提出された。最終の授業は、6名の教員が壇上に登り、LMSで提示された質問に教員が回答する形式で進められた。教員が、質問した学生と熱心に議論する場面もみられ理解が深まったと思われる。なお、この授業の世話役(津村文彦准教授)が、参観者あるいは授業公開者の感想をまとめて本学のFDサイトに掲載しているので参照されたい。また、同氏からFD担当に寄せられた授業の主旨等は次の通りである。

「授業内容に関わる概要と目標は、シラバスに記載のとおりですが、この授業をオムニバスで開講するもうひとつの目的は、学術教養センターの教育・研究テーマの広がりをもひとつの授業で表現し、学生の関心領域をより幅広くすることでした。通常の履修では、自分自身に関心をもつ限られた科目のみしか履修せず、それ以外の科目や教員に触れることはありません。しかし、本学の学術教養センターは幅広い領域をカバーしているので、学生にもそれぞれの領域の入口をオムニバス形式で見せることによって、これまで興味のなかった分野に目を開かせることを目指しました。またオムニバスとはいえ、担当する教員の多くが、自分の担当回以外にも出席しており、教員同士がお互いの教育の様子を互いに見ることによって、「授業公開」が自然に毎回行われたともいえるような効果もあったと思われます。（オムニバス授業世話役、津村文彦准教授による）

2.5.3 FD研修

学術教養センター独自の研修イベントはなく、授業公開同様フレックスの研修事業に参加した。以下の通りである。

○ フレックス主催 FD合宿研修会

日 時 2010年9月3日～4日

会 場 冠荘（池田町）

参加者 山川 修 教授

研修会報告 山川 修

FレックスのFDチームが企画した、第1回の合宿研修会が池田町の冠荘で開催されたので参加した。1日目の内容は、福井工業大学、島田先生による初年次教育の取組、福井大学、本田先生による、GPに関係するポートフォリオの取組、京都大学、溝上先生による、アンケートから見える福井県の学生の特徴のお話だったが、特に、溝上先生のお話は、一般論ではなく、県内の大学で実施した学生の生活実態調査アンケートを分析した報告だったので、非常に刺激的であった。できれば、このアンケートを継続して、経年変化をみると、学生理解が深まるのではないかと考え、後日の教育学習支援チーム会議で提案し、教育企画推進委員会を経て、来年度以降、福井県立大学でのこのアンケートの実施が決定している。2日目は、Fレックスコミュニティ推進員の澤崎氏による、プレゼン能力の向上の講座であった。講座の中では、Fレックスの将来というテーマで「ワールドカフェ」を実施したが、このグループワークの手法は、参加された多くの方と議論が可能になり、授業で是非使ってみたい手法で、大変参考になった。

プログラム

9月3日（金）13時～18時

研究会1「初年次教育、ポートフォリオの取り組み」報告

島田 幹夫氏（福井工業大学）、本田 知己氏（福井大学）

9月4日（土）9時～12時

研究会2「アンケートから見る福井県の学生の特徴」

溝上 慎一 氏（京都大学高等教育開発推進センター）

研究会3「スキルアップ講座 プレゼン能力の向上を目指そう」

澤崎 敏文 （Fレックスコミュニティ推進員）

○ 「学習評価・GPA、学士力保証」研究会

日 時 2011年1月28日17：00～19：30

場 所 仁愛女子短期大学A210

参加者 徳野淳子講師，菊沢正裕教授

研究会報告 菊沢正裕

高等教育機関における「学力」と何か，学士力保証とは何か，等の議論が華やかな昨今，議論の整理のために「学習評価・成績評価」に焦点をあてた研究会（Fレックス主催）が開催され参加した．プログラムは次の通りである．

第1部 基調講演「学習評価と GPA の導入～同志社大学の事例～」

同志社大学教授 圓月勝博氏

（同大教務部長，大学基準協会会員，日本私立大学連盟 FD 運営委員長）

第2部 Fレックス参加校の現状報告と議論

基調講演では大学審議会答申（1998），中央教育審議会答申（2005,2008）を引用しながら「学習評価と学士力保証」の背景を解説．続いて「GPA 等の客観的な基準を学内で共有し，教育の保証に向けた厳格な成績評価」をすることの重要性を説明．さらに，国際的な基準としての GPA，日本の高等教育機関の 46%（2011 年 1 月現在）が GPA を導入していること，GPA の特性や成績評価との関係，FD との位置づけ等について説明．後半は，同志社大学での具体的な導入方法，適用方法，利用方法等について質疑応答を交えて説明された．第2部では，GPA を既に導入している福井工大と仁愛大学の事例が紹介された後，GPA の利用方法について質疑や議論が活発になされた．GPA の導入を図るかどうかの前に，厳格な成績評価についての学内議論が急がれるとの印象を深くした．

3. 点検と課題

看護福祉学部 本田 和正

3.1 授業評価

(1) 新授業評価アンケートの実施

本年度より、授業評価アンケートの質問数を従来の18項目から重要項目である[教師の質]、[学習者の意欲]、[学習者の充実感]と名付けた構成概念を評価するうえで重要な質問で、具体的には各々「授業を総合的に評価せよ」、「分野への関心が高まったか」、「授業内容を理解できたか」の3つの質問を含む5項目とするアンケートによって実施した。新授業評価アンケートの実施により、学生への負担軽減、学期途中での実施等の実現、質問紙の印刷等経費の節減をめざした。また、重要3項目については旧アンケートから引き継ぐことで評価結果の継続性を保つことをめざした。

(2) 授業評価結果の経年特性

上記の重要3項目についての部局平均値の経年特性を図1（前期）と図2（後期）に示す。なお、授業評価は2004年度より実施しているが、2005年以降の質問項目と違いがあるため2005年度以降の結果を掲載している。また、2009年度より海洋生物資源学科が学部化されたため、同学部のグラフを独立させて示してあるが、2008年度以前のデータは生物資源学部全体のデータ（生物資源学科と海洋生物資源学科を合わせたデータ）を両学部で便宜的に使用していることをご了承いただきたい。

部局別の経年変化とそれに対する対応等は各部局のFD活動の項に記述されているのでそちらを参照していただきたい。

ほぼすべての年度において、授業の質に関係する「総合評価」は高く、学力に関係する「内容理解」は低く、教師と学生の両者に関係する「関心が高まった」は、その中間にある傾向がある。海洋生物資源学部を除く全ての部局において前期より後期の値が高くなる傾向が認められた。2009年度から2010年度への変化をみると「関心」「総合」は横ばいまたは低下であり、「内容」は一般教育の前期を除いて低下傾向にある。

(3) 課題

今年度は新アンケートによる授業評価を初めて実施した年度であり、重要3項目は旧アンケートからそのまま引き継いでいるが、質問数が大幅に減ったことが学生の回答に影響した可能性は否定できない。したがって更に数年間は経年変化を見る必要があると考えられるが、経年変化の継続性が保たれていると仮定すると本年度の評価値、特に「内容理解」が一般教育科目を除いて低下傾向であることが気になる点である。学力低下が原因かどうかを見極める必要があるが、特に専門教育科目の授業については、より平易な授業を目指して授業改善を実施すべきであることを示唆していると考ええる。

授業評価結果が生かされていないという指摘を受け、今年度後期より授業評価結果に対する教官コメントをシラバスにリンクさせることで原則公開することに決定したが、これ

が各教官の評価を受け止める姿勢に良い効果をもたらす事を期待して次年度の結果を待ちたい。また、個人評価結果は担当教員の承諾が得られた場合についてのみ公開しているが、原則公開についても検討を進める必要を感じる。その際に、授業評価値は学生への負荷の度合いにも大きく左右されることが明らかであるので、負荷の感じ方を問う設問を設けることも検討すべきであろう。

チーム会議で指摘されたことでもあるが、全学的に受け入れられてきている授業評価アンケートに依然として参加しない教員が存在すること、評価結果に対するコメントを記述しない教員が多数存在することは憂慮すべきである。FD活動に対して依然として否定的姿勢を持つ本学教員の姿勢を如何にして変えていくかが、教育学習支援チームの今後の最大の課題であるかもしれない。

3.2 授業公開と研修

本学における授業公開は2004年度後期に全学的に開始され、2007年度から各部局の特徴や状況を尊重して部局毎に実施されるようになった。公開を実施した教員あるいは参観した教員からは授業公開が役だったという感想を得ている。しかし、部局によっては授業公開はやり尽くしたので、もう必要がないとの意見が出ており、その実施方法について次の段階を模索すべき時期に来ていることは否めない。しかし実際に授業公開に参加している教員は部局によって程度の差はあるが非常に偏っており、また、教員の世代交代も進んでいることを考慮すると、持続して実施していくことは絶対に必要である。随時授業公開を実施する部局が増えているが、実際には参観者が無く公開が成立しなかった例が多くみられるので、随時公開制をとりながらも参観者に何らかの義務を付加すること、例えば年に最低でも1回は授業参観をして報告書の提出を求めるなど、も検討する必要があると考える。

単に技術的な事項を検討するだけの授業公開にとどまらず、経済学部や生物資源学部で取り組みの動きがあるが、学部学科としての教育の整合性を保つ観点で授業内容にも立ち入った授業公開や授業内容そのものの検討も必要であると考ええる。

本年度はFレックス内のFDチームの企画によるFD研修会等に本学からも参加者があった。例えば、授業公開とその研究会、FD合宿研修会、学習評価研究会などである。県内他大学のFD活動の実体や他大学教員のFDに対する意識に触れることは本学のFD活動にも大きな刺激となり得るので、本学教員がFレックスの活動に参加することを更に推進することも大変重要であると考ええる。本学教員のFDに対する意識はいまだに十分とは言えない状況にあるので、FD研修会の企画、参加案内等をより強力に推進していくことが必要であろう。

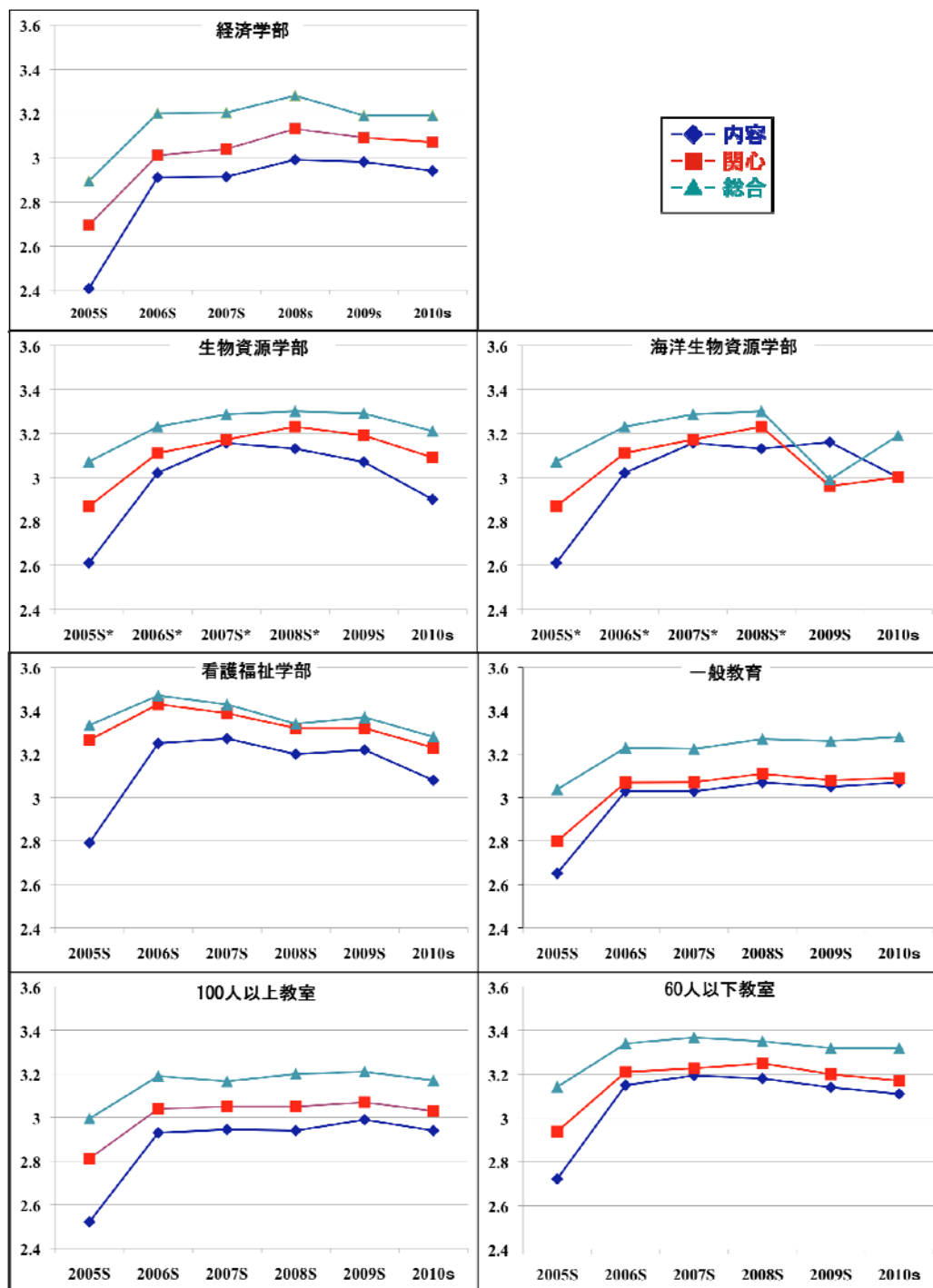


図1 重要項目の経年特性（前期）

(注)

- ・「総合(評価)」は授業の質, 「内容(が理解できた)」は学生の満足度や学力, 「関心(が高まった)」は, 教師と学生双方の努力, に各々関係していると考えている.
- ・軸の数値 2005S の S は春学期(前期)を, 次頁の F は秋学期(後期)を意味する.
- ・2005 年前期(2005S)の内容(を理解できたか)が特に低いのは, 選択肢の違いによるところが大きいと思われる. 2005 年前期の選択肢が「ほとんど理解できなかった」, 「かなり理解できなかった」, 「おおむね理解できた」, 「ほとんど理解できた」であったのに対し, 2005 年後期以降の選択肢は, 「理解できなかった」, 「あまり理解できなかった」, 「ある程度理解できた」, 「理解できた」である.

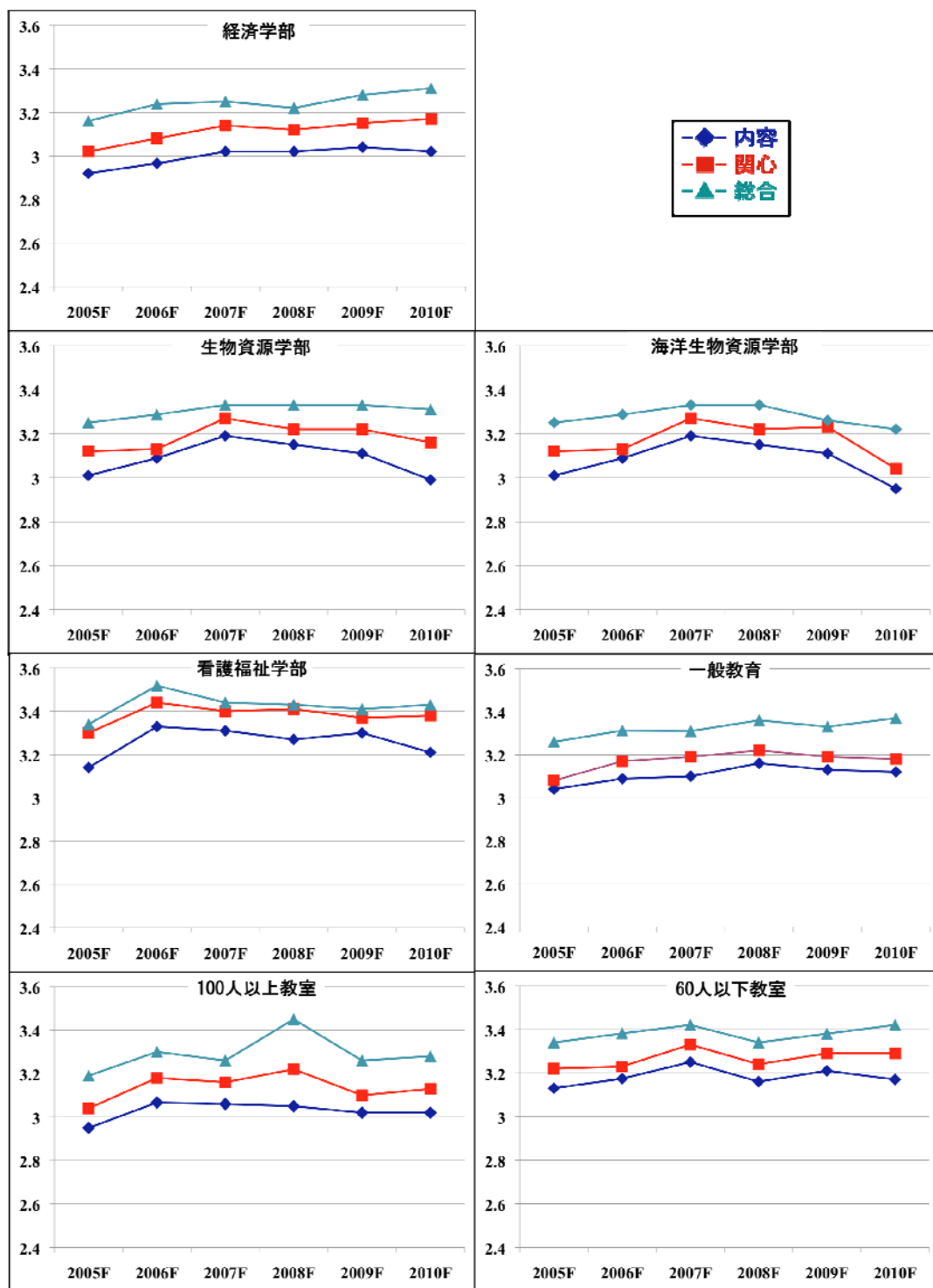


図2 重要項目の経年特性（後期）

おわりに

本学では2002年度にFD事業が試行的にスタートし、2005年度には軌道に乗り始めました。更に2006年度以降は各部局の特性を生かしたFD事業が取り入れられ、部局独自の授業公開やFD研修が実施されるに至りました。しかし、一方では学生による授業評価結果の信頼性に対する疑問、授業評価結果あるいは授業公開結果が目に見える形で活かされていないなどの指摘があります。

今年度より授業評価アンケート項目を大幅に減少させて学生の負担軽減が実現したので、結果の信頼性向上につながることを期待されます。また、授業評価結果に対する教員コメントを原則公開とすることで、各教員が授業評価結果を受け止める姿勢に変化が出ることを期待したいと考えます。

真の授業改善は各教員が常に自身の担当授業について反省的動機をもって関わることで達成されるのであって、FD事業による義務的、形式的なイベントをこなすだけではとうてい達成できないと考えます。本学で実施されている授業評価、授業公開などはすべて各教員が自身の授業を顧みるきっかけを与えているに過ぎず、それを活かすかどうかは各教員の意識の問題であると考えます。しかし、この2年間の本学のFD事業、特に授業評価の結果は憂慮すべきであると考えます。授業評価結果へのコメントの原則公開だけではなく個人結果の公表等にも踏み切ることを検討すべき時期にきていると考えます。

教育学習支援チームによるFD事業が次の段階に進むべき時期に来ていることは確かではありますが、それ以前に教員個々のFDに対する意識がより高まることを期待します。

教育学習支援チーム FD 担当リーダー 本田 和正

ファカルティ・ディベロップメント報告書 2010

発行年月 2011年3月

編集・発行 福井県立大学教育学習支援チーム